

やまぐちチャレンジ&エコツアー2025 “やまぐちアドベンチャー キャンプ”

- ・やまぐちアドベンチャーキャンプ
- ・山口県野外教育活動指導者研修会



主催：山口県教育委員会
共催：（公財）山口県ひとづくり財団
後援：山口市教育委員会

目次

ページ

第1章 事業の概要

02

実施要項

第2章 事業の実際

05

プログラム内容と活動の様子

第3章 事業の効果

14

参加者アンケートから

参加者追跡アンケート（2ヶ月後）から

保護者追跡アンケート（2ヶ月後）から

第4章 指導者の育成

30

山口県野外教育活動指導者研修会

事業の概要

令和7年度 地域と連携したリアルな体験活動充実事業

「やまぐちチャレンジ&エコツアー」実施要項



令和7年度 地域と連携したリアルな体験活動充実事業
「やまぐちチャレンジ&エコツアー」 実施要項

山口県教育委員会

1 趣 旨

自然体験活動やグループでの他者との関わりを通して、自分の能力や可能性に気づき、子どもたちの社会を生き抜く力として必要な非認知能力（自己肯定感、自律性、協調性、積極性等）の向上を図る。

また、地域の特色を生かしたエコツアーを通して、自然環境や歴史文化等を体験しながら学ぶことで、自然や文化を守り、未来への遺産として引き継いでいく活力ある持続的な地域をつくる人材を育成する。

2 主 催

山口県教育委員会

3 共 催（予定）

（公財）山口県ひとづくり財団（山口県十種ヶ峰青少年自然の家）

4 後 援（予定）

山口市教育委員会

周防大島町

周防大島町教育委員会

5 実施プログラム及び対象、期間等（予定）

プログラム名	対 象	定員	期 間	実施場所
やまぐちアドベンチャーキャンプ	小学5・6年生 及び中学生	32人	7月26日(土)～8月2日(土) [7泊8日]	十種ヶ峰青少年 自然の家及び周 辺山城
しまキャン	小学4～6年生 及び中学生	16人	7月19日(土)～7月20日(日) [1泊2日]	周防大島町
魅力発見エコツアー	小学4～6年生 及び中学生	16人	11月1日(土)～11月3日(月) [2泊3日]	周防大島町

6 プログラム内容

プログラム名	活動内容例（実施しない場合もあります）
やまぐちアドベンチャーキャンプ	<ul style="list-style-type: none"> バックパッキング（荷物を背負っての山歩き） ソロ（一人になる環境で思考する活動） ロッククライミング ・マウンテンバイク グループミーティング ・クリーンアップ（片付け）等
しまキャン	<ul style="list-style-type: none"> 講習会（自然・環境） ・シュノーケリング シーカヤック ・海浜清掃等
魅力発見エコツアー	<ul style="list-style-type: none"> みかん収穫体験及びジュース・ジャム作り みかん鍋調理 ・フラダンス体験 自然物のリース作り等

7 事前説明会（やまぐちアドベンチャーキャンプのみ）

日時：令和7年6月29日（日）9時30分～12時00分

場所：山口県十種ヶ峰青少年自然の家（山口市阿東）

対象：やまぐちアドベンチャーキャンプ参加者及び保護者（親子での参加）

※しまキャン及び魅力発見エコツアーの事前説明会はありません。

内容：プログラムの目的及び持参品説明、質疑応答、参加者同士の人間関係づくり、野外活動に係る基本スキルのレクチャー等

※応募多数による抽選の場合、事前説明会への出席が可能な参加者を優先する。

8 参加費（予定）

プログラム名	参加費	内訳
やまぐちアドベンチャーキャンプ	20,000円	食費、施設使用料、保険代、装備物品代、消耗品費等
しまキャン	12,000円	食費、活動費、保険代、宿泊費、消耗品費等
魅力発見エコツアー	20,000円	食費、活動費、保険代、宿泊費、消耗品費等

9 持参物

プログラム名	持参物（例）
やまぐちアドベンチャーキャンプ	<p>長袖シャツ、半袖Tシャツ、下着、長ズボン、ソックス、帽子、タオル、登山靴、カップ（丈夫な物）、ヘッドランプ、軍手、油性ボールペン、空のペットボトル(500ml)、チャック式クリアフォルダー、歯ブラシ、ビニル袋、虫除けスプレー・虫さされの薬、水着等</p> <p>※ザック等の野外の生活に必要な装備の多くは主催者側で共同装備として準備（詳細は事前説明会時に説明）</p>
しまキャン	<p>衣類（2日分の着替え）、帽子、雨具（傘またはカップ）、懐中電灯、タオル（入浴用と洗面用）、洗面用具、筆記用具、軍手、ビニル袋、常用薬・酔い止め薬（必要な人）、活動用リュックサック、虫除けスプレー・虫さされの薬、水着（ラッシュガード含む）、マリンシューズ、水泳帽子等</p> <p>※詳細は参加決定通知に記載</p>
魅力発見エコツアー	<p>衣類（防寒着及び3日分の着替え）、帽子、雨具（傘またはカップ）、懐中電灯、タオル（入浴用と洗面用）、洗面用具、筆記用具、軍手、ビニル袋、常用薬・酔い止め薬（必要な人）、活動用リュックサック</p> <p>※詳細は参加決定通知に記載</p>

10 募集方法及び申込方法

プログラム名	募集方法	申込方法
やまぐちアドベンチャーキャンプ	<ul style="list-style-type: none"> 5月上旬に県内全小・中学校及び特別支援学校（小・中学部）に募集チラシを配付 地域連携教育推進課ホームページに募集ページを掲載 	往復はがき （6月2日(月)必着）
しまキャン	<ul style="list-style-type: none"> 地域連携教育推進課ホームページに募集ページを掲載 5月上旬に小・中・高等・総合支援学校に体験活動情報の案内メール登録を促すチラシを配付し、事業実施約2か月前に登録者にメールにて募集案内通知 	電子申請 （詳細はホームページに掲載）
魅力発見エコツアー		

11 その他

- やまぐちアドベンチャーキャンプ参加者の決定にあたっては、不登校等の課題を抱える児童生徒に配慮する。
- 山口県野外教育活動指導者研修会を修了した指導者及び学生ボランティア等が指導にあたる。
- 本事業は文部科学省の委託事業を活用して実施する予定としており、委託契約の条件等によっては内容を変更する場合がある。

12 問合せ先

山口県教育庁地域連携教育推進課 青少年教育班 担当：中島
〒753-8501 山口県山口市滝町1-1
電話：083-933-4650 FAX：083-933-4669
電子メール：nakashima.tatsuhiko@pref.yamaguchi.lg.jp

事業の実際

令和7年度 地域と連携したリアルな体験活動充実事業

プログラム内容と活動の様子



プログラム内容と活動の様子

1日目 (7月26日)

開会式、ダッフルシャッフル、昼食



パッキング、地図読み、コース確認



バックパッキング(自然の家～方丈原)



テント設営、野外調理



プログラム内容と活動の様子

2日目 (7月27日)

テント撤収、朝食、パッキング、コース確認



バックパッキング(方丈原～神角)へ



ディップ(水浴び)



テント設営、休息、ふりかえり、夕食



プログラム内容と活動の様子

3日目 (7月28日)

朝食、パッキング、地図読み・コース確認



バックパッキング(方丈原～上宇都根)



テント設営、ふりかえり、夕食



プログラム内容と活動の様子

4日目 (7月29日)

朝食、テント撤収



マウンテンバイクコース(男子班)



ロッククライミングコース (男子班)



ソロコース(女子班)



フルーツパーティー、ふりかえり



プログラム内容と活動の様子

5日目 (7月30日)

テント撤収、朝食、出発



マウンテンバイクコース(女子班)



ロッククライミングコース (女子班)



ソロコース(男子班)



ふりかえり



プログラム内容と活動の様子

6日目 (7月31日)

朝食、テント撤収、出発準備



バックパッキング(ファイナルツアー:十種ヶ峰山頂へのピークアタック)



バックパッキング(山頂～方丈原)



ふりかえり



プログラム内容と活動の様子

7日目 (8月1日)

テント撤収、水補給



バックパッキング(方丈原～自然の家)



クリーンナップ、昼食



ラストナイトミーティング、最後の夜



プログラム内容と活動の様子

8日目 (8月2日)

朝食



仲間へのコメント、ミーティング



個人ラン



閉会式、解散



事業の効果

令和7年度 地域と連携したリアルな体験活動充実事業

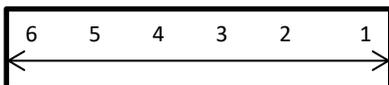
参加者アンケートから



参加者によるアンケート結果

やまぐちアドベンチャーキャンプ2025

事前調査 7/26実施 (回収率 100%)
 事後調査 8/2実施 (回収率 100%)
 追跡調査 10/2実施 (回収率 90%)



とてもよくあてはまる

まったくあてはまらない

□質問をよく読み、自分にあてはまるかどうか、「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの6段階で教えてください。

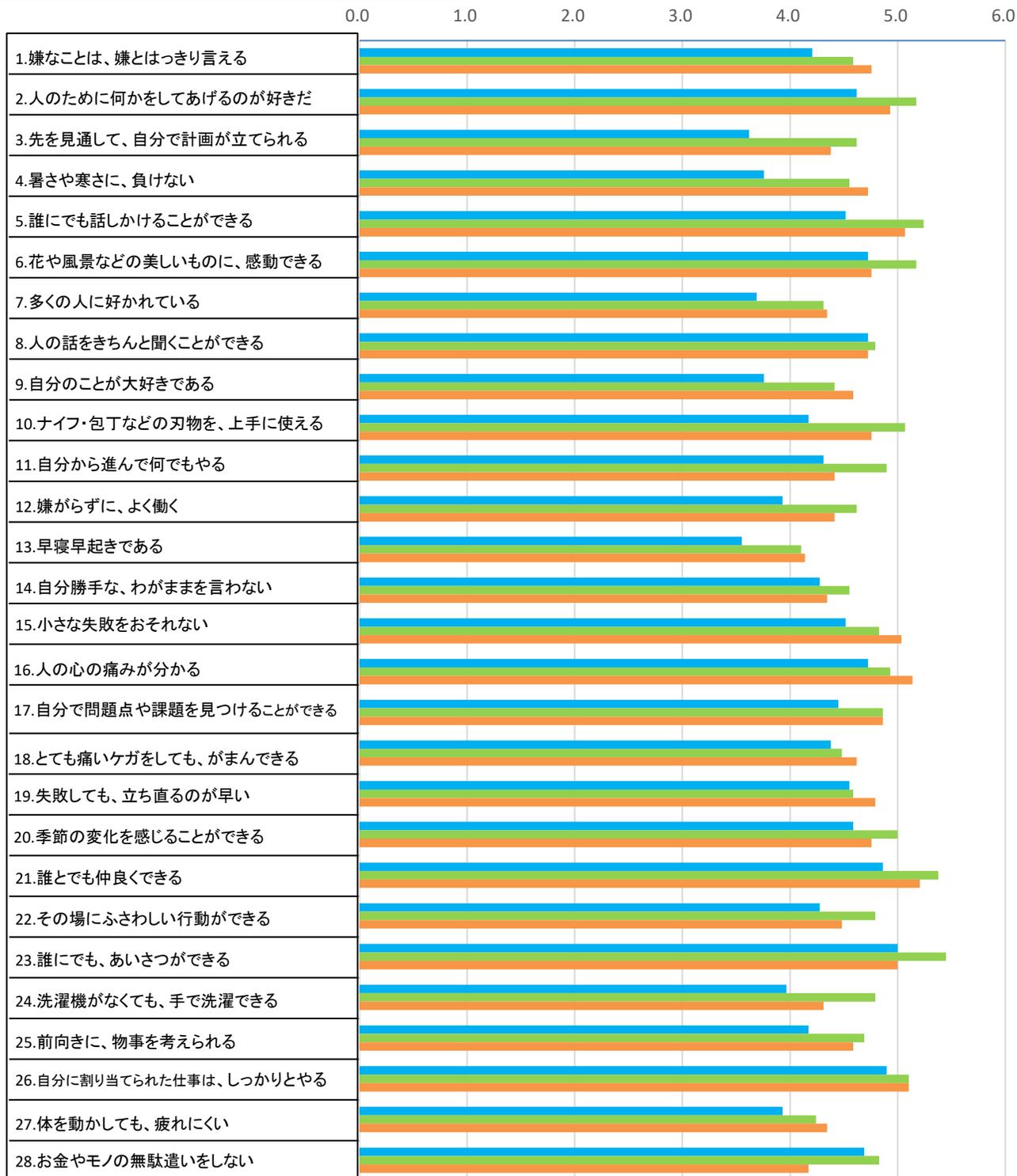
※合計得点の変化を視覚化。「IKR(生きる力)評定用紙(簡易版)」(国立青少年教育振興機構)による。

やまぐちアドベンチャーキャンプ

上段:事前調査

中段:事後調査

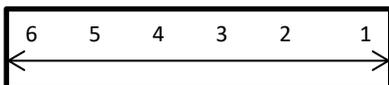
下段:追跡調査



参加者によるアンケート結果

やまぐちアドベンチャーキャンプ2025

事前調査 7/26実施 (回収率 100%)
 事後調査 8/ 2実施 (回収率 100%)
 追跡調査 10/ 2実施 (回収率 90%)



とてもよくあてはまる

まったくあてはまらない

□質問をよく読み、自分にあてはまるかどうか、「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの6段階で教えてください。

※合計得点の変化を視覚化。「IKR(生きる力)評定用紙(簡易版)」(国立青少年教育振興機構)による。

チャレンジ&エコツアー

上段:事前調査

中段:事後調査

下段:追跡調査

0.0

2.0

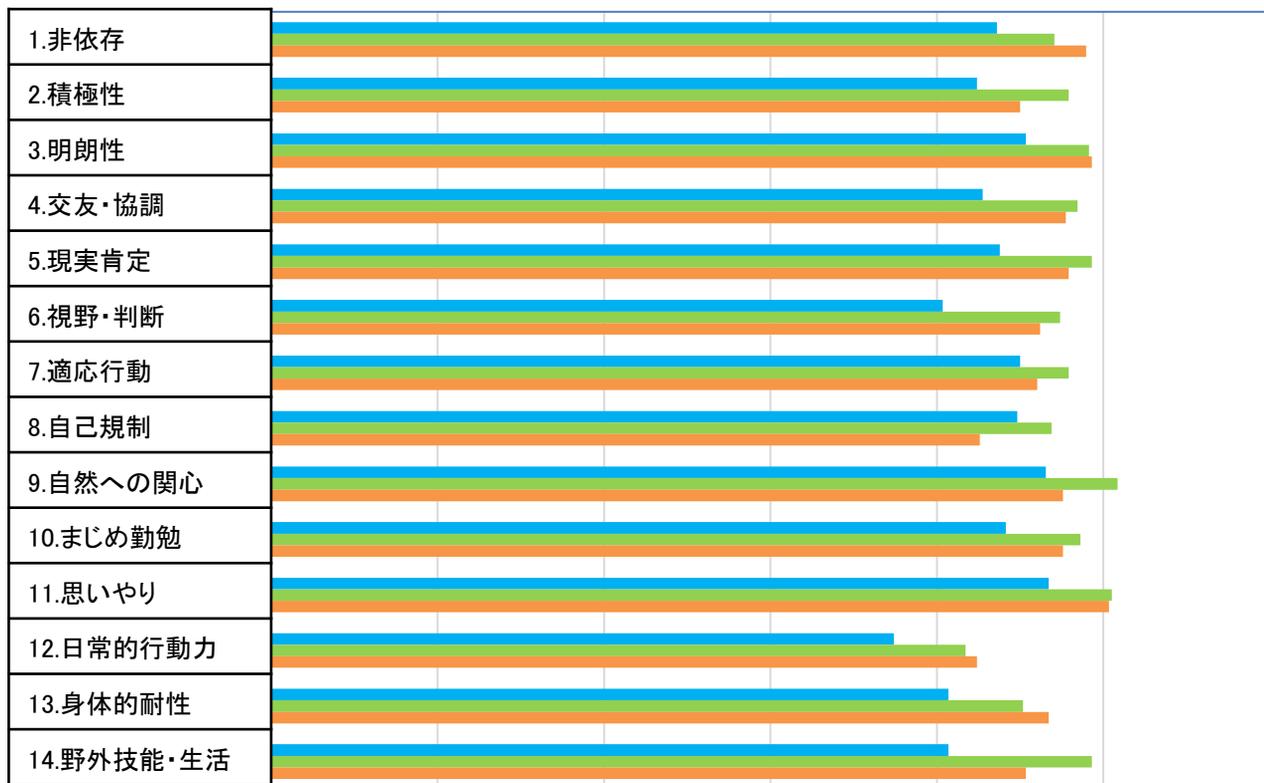
4.0

6.0

8.0

10.0

12.0



【考察】生きる力の測定値において、プログラム前後で13.2ポイント、2か月後の追跡調査でもプログラム前から9.9ポイントの向上が見られた。14の因子別においても、各因子で得点が上昇しており、特に非依存、交友・協調、視野・判断、日常的行動力、身体的耐性においては、プログラム前から2か月後の追跡調査の間で1ポイントを超える得点の上昇が見られた。

「非依存」の質問項目	<ul style="list-style-type: none"> いやなことは、いやとはっきり言える。 小さな失敗をおそれない。
「交友・協調」の質問項目	<ul style="list-style-type: none"> 多くの人に好かれている。 だれとでも仲よくできる。
「視野・判断」の質問項目	<ul style="list-style-type: none"> 先を見通して、自分で計画が立てられる。 自分で問題点や課題を見つけることができる。
「日常的行動」の質問項目	<ul style="list-style-type: none"> 早寝早起きである。 からだを動かしても、疲れにくい。
「身体的耐性」の質問項目	<ul style="list-style-type: none"> 暑さや寒さに、まけない。 とても痛いケガをしても、がまんできる。

名称 やまぐちアドベンチャーキャンプ

調査対象事業の概要

(実施期間) 2025/07/26～2025/08/02 7泊8日
 (参加者) 32名
 (主な活動) バックパッキング、テント泊、ソロ、野外調理、ロッククライミング、マウンテンバイク、ミーティング、個人ラン

調査時期	実施日	配布数	回収数	回収率	有効回答数	有効回答率
事前調査	7月26日	32	32	100.0%	29	90.6%
事後調査	8月2日	32	32	100.0%		
追跡調査	10月2日	32	29	90.6%		

分析結果

(分析対象数の内訳)

(人)

性別	小学生			中学生			高校生以上	無回答	計
	4年生	5年生	6年生	1年生	2年生	3年生			
男子	-	6	4	3	2	1	-	-	16
女子	-	7	4	3	0	2	-	-	16
無回答	-	-	-	-	-	-	-	-	-
計	-	13	8	6	2	3	-	-	32

(生きる力・28項目の集計結果)

能力	調査項目	事前調査		事後調査		追跡調査	
		M	SD	M	SD	M	SD
生きる力		120.9	17.5	134.1	15.3	130.8	19.6
心理的社会的能力		60.7	8.8	67.4	8.1	66.2	10.3
	非依存						
	1. いやなことは、いやとはっきり言える	4.2	1.0	4.6	1.1	4.8	1.2
	15. 小さな失敗をおそれない	4.5	1.0	4.8	1.2	5.0	1.2
	積極性						
	11. 自分からすすんで何でもやる	4.3	1.0	4.9	0.9	4.4	1.2
	25. 前向きに、物事を考えられる	4.2	1.2	4.7	1.2	4.6	1.2
	明朗性						
	5. だれにでも話しかけることができる	4.5	0.9	5.2	0.7	5.1	1.1
	19. 失敗しても、立ち直るのがはやい	4.6	1.2	4.6	1.4	4.8	1.3
	交友・協調						
	7. 多くの人に好かれている	3.7	1.3	4.3	1.2	4.3	1.3
	21. だれとでも仲よくできる	4.9	1.1	5.4	0.8	5.2	0.8
	現実肯定						
	9. 自分のことが大好きである	3.8	1.4	4.4	1.3	4.6	1.3
	23. だれにでも、あいさつができる	5.0	1.4	5.4	0.8	5.0	1.0
	視野・判断						
	3. 先を見通して、自分で計画が立てられる	3.6	0.8	4.6	0.9	4.4	1.3
	17. 自分で問題点や課題を見つけることができる	4.4	1.1	4.9	1.0	4.9	1.0
	適応行動						
	8. 人の話をきちんと聞くことができる	4.7	1.0	4.8	0.9	4.7	0.8
	22. その場にふさわしい行動ができる	4.3	1.3	4.8	1.1	4.5	1.1
徳育的能力		36.4	6.1	39.4	4.6	37.6	6.4
	自己規制						
	14. 自分かつてな、わがままを言わない	4.3	1.4	4.6	1.2	4.3	1.3
	28. お金やモノのむだ使いをしない	4.7	1.4	4.8	1.2	4.2	1.7
	自然への関心						
	6. 花や風景などの美しいものに、感動できる	4.7	1.2	5.2	0.9	4.8	1.4
	20. 季節の変化を感じることができる	4.6	1.2	5.0	1.2	4.8	1.2
	まじめ勤勉						
	12. いやがらずに、よく働く	3.9	1.4	4.6	0.9	4.4	1.2
	26. 自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.9	0.9	5.1	0.7	5.1	1.0
	思いやり						
	2. 人のために何かをしてあげるのが好きだ	4.6	1.3	5.2	0.8	4.9	1.1
	16. 人の心の痛みがわかる	4.7	1.1	4.9	1.1	5.1	1.0
身体的能力		23.8	5.4	27.2	4.2	26.9	5.5
	日常的行動力						
	13. 早寝早起きである	3.6	1.5	4.1	1.6	4.1	1.5
	27. からだを動かしても、疲れにくい	3.9	1.5	4.2	1.2	4.3	1.3
	身体的耐性						
	4. 暑さや寒さに、まけない	3.8	1.2	4.6	1.2	4.7	1.0
	18. とても痛いケガをしても、がまんできる	4.4	1.6	4.5	1.2	4.6	1.5
	野外技能・生活						
	10. ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.2	1.3	5.1	0.9	4.8	1.3
	24. 洗濯機がなくても、手で洗濯できる	4.0	1.5	4.8	1.4	4.3	1.6

*各項目で「とてもあてはまる」を6点、「まったくあてはまらない」を1点としてそれぞれ1点刻みで得点化し、項目ごとに平均点 (M) 及び標準偏差 (SD) を算出

「生きる力」の変容 (得点範囲：28～168点)

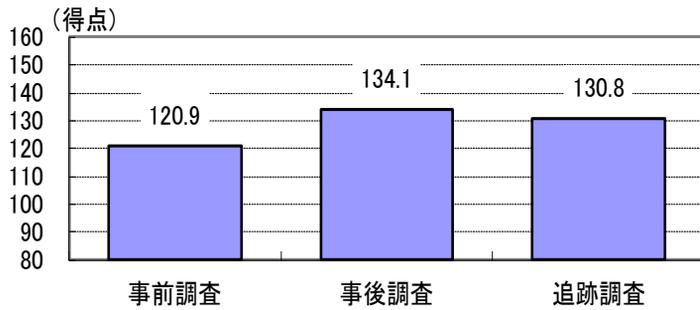


図1. 「生きる力」の平均値の推移

(事前－事後)

- ・事前から事後にかけて 13.2ポイント向上
- ・その向上に有意差が見られた

(事後－追跡)

- ・事後から追跡にかけて 3.3ポイント低下
- ・その低下に有意差は見られなかった

(事前－追跡)

- ・事前から追跡にかけて 9.9ポイント向上
- ・その向上に有意差が見られた

「心理的社会的能力」の変容 (得点範囲：14～84点)

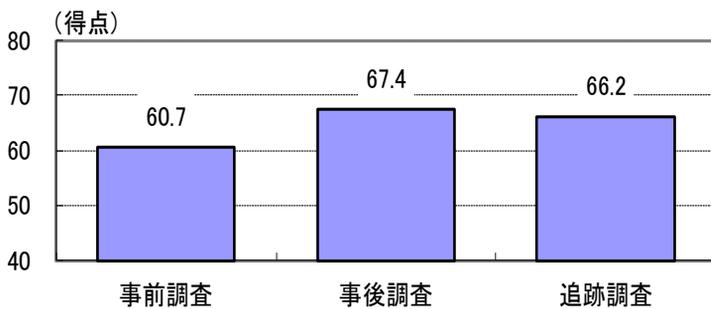


図2. 「心理的社会的能力」の平均値の推移

(事前－事後)

- ・事前から事後にかけて 6.7ポイント向上
- ・その向上に有意差が見られた

(事後－追跡)

- ・事後から追跡にかけて 1.2ポイント低下
- ・その低下に有意差は見られなかった

(事前－追跡)

- ・事前から追跡にかけて 5.5ポイント向上
- ・その向上に有意差が見られた

「徳育的能力」の変容 (得点範囲：8～48点)

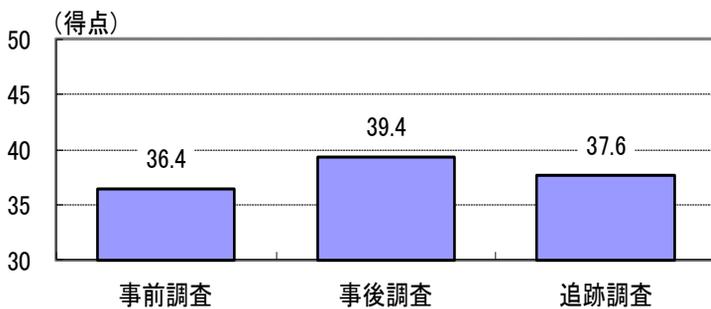


図3. 「徳育的能力」の平均値の推移

(事前－事後)

- ・事前から事後にかけて 3.0ポイント向上
- ・その向上に有意差が見られた

(事後－追跡)

- ・事後から追跡にかけて 1.8ポイント低下
- ・その低下に有意差は見られなかった

(事前－追跡)

- ・事前から追跡にかけて 1.2ポイント向上
- ・その向上に有意差は見られなかった

「身体的能力」の変容 (得点範囲：6～36点)

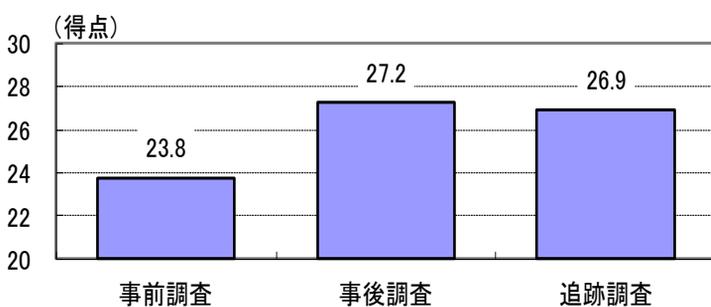


図4. 「身体的能力」の平均値の推移

(事前－事後)

- ・事前から事後にかけて 3.4ポイント向上
- ・その向上に有意差が見られた

(事後－追跡)

- ・事後から追跡にかけて 0.3ポイント低下
- ・その低下に有意差は見られなかった

(事前－追跡)

- ・事前から追跡にかけて 3.1ポイント向上
- ・その向上に有意差が見られた

(参加者追跡アンケートから)



やまぐちアドベンチャーキャンプ

参加者追跡アンケート

(自由記述。同じ内容はまとめました)

やまぐちアドベンチャーキャンプの経験を生かして、この2か月で自分が成長したと思うこと

学習面

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">・時間を気にかけるようになった。・問題を解くときに「あきらめずにまだやるぞ！」と、やることができた。・積極的になった。発表をたくさんするようになった。・友達と自主的に学習に取り組めるようになった。・いろいろな教科で分からなくても、最後までやるようになった。・少し自信がない問題でも、少しずつ発表できるようになった。多くの友達に教えてあげられるようになった。・目標に向かって、あきらめずに達成した。・自然の事など意欲的に調べるようになった。またキャンプで学んだことを生かしながら、つなげながら学習することが増えた。 | <ul style="list-style-type: none">・テスト勉強の時、キャンプをやりとげたことを思い出して、はかどらせることができた。・ぼくは、家庭科が苦手です特に料理が苦手でしたが、キャンプで仲間と料理し、時にはコツとかも教えてくれたので、できるようになりました。・地図の見方がわかり、社会で地図がよめた。・キャンプで不便だったものを組み合わせて、どのようにすればもっといいだろうか、などを考えていた→応用力が上がった。・授業中に積極的に手を挙げるようになりました。・キャンプよりはマシだと思えるようになり頑張れた。・少しは自ら勉強をするようになった。・根気強くがんばれるようになった。・宿題をきちんとできるようになった。 |
|---|--|

生活面

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ちょっとした料理をつくるのが、多くなった。・少しずつ自分のことができるようになった。・なんでも積極的にできるようになった。色々な事に挑戦できるようになった。・ごはんを作れるようになった。・お手伝いがよりできるようになりました。・いつもよりさらに早寝早起きができるようになった。・自分から進んで、人がやりたくなさそうなことをできるようになった。・体力がつき、動くことが多くなった。・学校や家でも、周囲をよく見て周りの人に合わせて、喜んだりできるようになった。・習い事でも、新しいことにチャレンジできました。・色々なものに感謝して使うことができています。・パパッと動けるようになった。 | <ul style="list-style-type: none">・嫌いな学校に行けるようになった。・できないことが出てきても、キャンプではチャレンジしていたと思い、挑戦できるようになった。・ロッククライミングや個人ランのおかげで、体力がつき、休日に公園でいっぱいあそんでいます。・何事にもチャレンジしてみよう！と、思うようになった。・ポジティブに考えられるようになった。・風呂やトイレの大切さがわかり、風呂にはすぐ入るようになりました。・自分でできたことが続けられるようになった。・家の手伝いをするようになった。・自分たちの身の周りのものは、大切だと思うきっかけになり、大切にできるようになった。 |
|--|--|

その他

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">・キャンプが終わってから植物が大切に思えてきたこと。・友達思いになった。・あまり話さなかった友達にでも、興味をもち、話しかけることができるようになった。・食べ物のありがたさと大切さを感じ、大切にできた。・虫ざらいが少しなくなった。・つらいことや大変なことがあってもキャンプの方が大変だったと、粘ってがんばることができるようになった。 | <ul style="list-style-type: none">・仲間や友だちの大切さを分かった。・前より新たな発見が多くなった。・友達との接し方がちょっと上手になった。・嫌いなものをがまんして食べられるようになった。・集中力が少し上がった。・山や自然にとっても興味をもつようになった。・電気をこまめに消すようになった。・どんなことも「キャンプよりマシだ」と思えるようになった。 |
|---|--|

やまぐちアドベンチャーキャンプ 参加者追跡アンケート (自由記述)

チャレンジ & エコツアーの経験を生かして、この2か月間がんばったことや感じたこと考えたこと

テスト週間は、前までは自分の本音に負けて遊んでしまうことがあったのですが、キャンプで得た忍耐力で、今はテスト勉強だけに専念することができています。生徒会では発言することがこわかったのですが、キャンプでリーダーを任せてもらったおかげで、発言することに自信がもてて、劇の案を言うことができました。

(中3女子)

「キャンプだったらどうしていただろう」、「キャンプのほうが辛かった」と、自分の中で考えてたくさん「挑戦」たくさん新しい「一歩」が出来たと感じます。今までの自分だったらあきらめていたことや、参加していなかったことを、キャンプに行き行って変わったことにより出来るようになりました。チャレンジ精神はいつまでも大事なことだと考えているので、キャンプで学んだことを生かしてこれからも新しい一歩をたくさん踏み出していきたいです。5年生の時に参加したキャンプではコロナに、今回ではやけどと熱を出してしまい、全日程いることがまだできていないので、今回も「前回のリベンジ！」という目標できたが、機会があれば「前々回、前回のリベンジ！」という目標でまた参加したいです。

(中1女子)

キャンプに行く前までは、自分で何かを決めたり、勇気を持って行動することができなかったけど、キャンプから帰って2か月間すごしていると、少し自分で決めることができるようになりました。その決めたことが自分にとって大変なことだったり、難しかったりすることだったけれど、一人でそれをできるようにがんばりました。アドベンチャーキャンプのことを時々思い出します。キャンプでは自分の気持ちを口で伝えることができたし、協力することで相手のよさを見つけることができました。また、我慢強くなったと思います。これからは、習い事や学校で自分が苦手だと思っていることにもチャレンジできるようになりたいです。そうすると新しい一歩を見つけることもできるかもしれないし、思っていたよりも楽しいことかもしれないからです。失敗したとしてもあきらめずにがんばりたいです。もっと一人でできることを増やしたいです！！

(中1女子)

よく、外であそぶことが増えました。また、生活面でもかいたように、テントがすぐにたてられるようになりました。あんまり、しゃべらなかつた人ともよくしゃべれるようになりました。キャンプの前はきまつた人とかしゃべらなかつたけど、いろいろな人としゃべることができるようになりました。

(小6女子)

年齢の違う人と関わるのが苦手だったけど、キャンプでそれを克服して、学校全体のリーダー役を行事でしました。自分が「しんどいなーっ」て時も、前に立つ時は、笑顔で仲間のために全力をつくすことが信頼にもつながり、頑張りについてもらえることも増え、自主的に手伝おうとしてくれる仲間もできました。キャンプで「最年長だからできたんじゃないって、あなただからできた」と、言ってもらった事がバネになっています。不安で泣いちゃうことしかできなかったけど、自分と仲間を信じて、今自分にできることは何か探してみるってことを大切に頑張ってます。高校の1日体験に行った時は、虫の克服に成功したなど実感がありました。山の中の農業高校ですが、虫によってあきらめるってことはもう絶対ないです。

(中3女子)

自分でテントをたてるできるようになりました。ごはんも作れるようになりました。

(中1女子)

大変なことを、アドベンチャーキャンプと比べて「これはあのキャンプよりは大変じゃない」と思ったり、「このくらいの重さの荷物、あのリュックにくらべたら、たいしたことない」と思ったり、妹や、重たいかばんを背負って、おんぶして、「これで登山もできる」と、たとえたり、なんでも関係することがあれば比べようになったり、少し我慢ができることがふえてきたんじゃないかなと思っています。

(小6女子)

学校への登校の道が辛くてもがんばれました。吹奏楽の練習がしんどくてもがんばれました。

(小6女子)

むずかしい仕事や、少しめんどろな手順がある、つかれる仕事に、周りの人は「やる！」と言わないです。アドベンチャーキャンプでは、みんなができることを探し、動くことが大切だったので、そういうことを、できる範囲でやりました。また、友達のことを考えて、周りを見て行動することも、集団にいる時にすごく大切だと思いました。だから、宿泊学習の時は、できるだけみんなが楽しく、後でため息をつくことがないようにしました。でも、まだきちんと「みんな」のために動いていないと感じるので、これからも意識してがんばりたいです。

(小6女子)

この2か月間はとくに自分のことができるようになったし、それに「自分自身にうち勝とう」ができてよかったです。

(小5女子)

思いやりや、協力をがんばりました。何事にも、一歩踏み出すことをがんばりました。仲間のいる幸せを感じました。家族のいる幸せと同時に、嬉しさも感じ、家族がいたからこそまで生きることができたのかもしれないと考えました。あの1週間、仲間がいたから、どんな苦難もりのこえられたのだと思いました。

(小5女子)

進んで色々なことを引き受けました。運動会の選手宣誓も引き受けました。また、協力して色々なことができるようになりました。掃除なども協力して速く終われるようになりました。役割分担もできるようになりました。自分ができるところを探してそのことをやったりたくさんのことに挑戦しました。キャンプが終わってからのたくさんの一歩をふみ出しました。キャンプで学んだことが自分の自信につながりました。

(小5女子)

2ヶ月の間に宿泊学習がありました。その時に、にんじんを切ったりしたときに、キャンプで包丁を使っていたので上手に他の野菜も切ることができました。バスから荷物を持って移動するときも、体力を山の中でつけて重いザックを持って移動したおかげで楽に運ぶことができました。勉強もできなかった問題がんばって、あきらめずに解くことができるようになりました。そして、キャンプが終わってから植物を大切に思えるようになりました。緑を見ると心が落ちつくようになりました。

(小5女子)

今までもゴミを捨ててなかったけれど、もっと気をつけた。このキャンプをきっかけに、3日間のキャンプに応募した。「やめたい」と思っても、やったことは責任もって、最後までやった。「あたりまえ」をふつうではなくす体験はあまりなくて、「あたりまえ」のことが、どれだけ役に立っているかが分かった。「自分では、こんな距離歩けない」とか、「こんな重い物もてるわけがない」と思っていたが、意外にたくさんの距離が歩けたり、自分の体重くらいある荷物を持てたりしたのに驚いた。このことから、自分の限界は、まだまだ先にあると気づいた。

(小5女子)



自分のことは自分ですることができ、きついことや嫌なことでも、我慢して行動することができ、何にでも諦めずに頑張れるようになりました。自分でもアドベンチャーキャンプは、自分の成長に役にたっていると感じます。この経験を受験や面接にいかしていきたいです。最初は少し嫌だったけど、参加したらけっこう楽しくて、きついこともあったけど、参加してとてもよかったと思っていて、すこし自信になりました。人との関わり方や、日頃の生活も変わり、とてもいい生活をするができるようになりました。このキャンプの経験が、これからの人生に役に立つと感じました。

(中3男子)

キャンプ終了→楽しい→少しツイ→キャンプより全然マシ→できる→自己肯定感マシマシ

(中2男子)

キャンプが終わった時もすごいことしたなあと思ってはいたけど、今考えると本当に僕が登ったのかなと思います。このキャンプに参加してから、僕は前より虫を我慢することに強くなりました。もう絶対に行きたくないけど、いい経験ができたと思います。

(中2男子)

このやまぐちアドベンチャーキャンプを通して感じたことは、やまぐちアドベンチャーキャンプの時に、みんなで団結して、7日間を過ごしたことで、協力して山に登ったり、話し合いや、たわいもないおしゃべりをしたことで、いつもとは違うコミュニケーション力が上がって、友達関係が良くなったことです。他にも、団結力などの力も鍛えられたと思います。それと、どのようにしたらより楽に登れるか、道具をどのように組み合わせると有効活用できるかなど、厳しいキャンプだからこそ、よく考えることができ、学習面も上がったのではないかと思います。今回のキャンプは、自分にとっては、けっこうつらいキャンプでしたが、それゆえに楽しいことや、成長したこともあったのだと思います。行ってよかったと思えました。

(中1男子)

走って追いつかれることが少なくなったり、「やっぱあの生活大変だったなー」と考えたり、体力が増えた感じもするし、早く起きすぎて2度寝をして遅れるという大惨事を体験したりした。

(中1男子)

今、行っている水泳クラブから違うクラブに移った方がよいということに、最近なってきたのですが、移るには体験に行くのですが、初めてのところだし、すごく緊張したけど、新たな一歩をふみ出して行ってみたら、とてもいいチームだった。そしてこのキャンプの経験をきっかけにして、これからもまだまだ、新たな一歩をふみ出しつづけたいです。

(中1男子)

だれかが1人ではできなかつたり、助けを求めていたら、まず声をかけて、自分にもできることだったら、できるかぎり、仲間を支えられるように、少しだけだけどなれたこと。

(小6男子)

アドベンチャーキャンプに参加して体力が増えて夏休みの間に富士山に登ることをがんばりました。そして、学校の周りを3周走る(約2キロ)と、前まで11分が限界だったのに、アドベンチャーキャンプに参加したら10分をきったので、また参加したいと思いました。学校の1000m走6年生男子の部で、8位に入れて嬉しかったです。

(小6男子)

キャンプで経験したことは山の中では、役に立つかもしれないけど、街の中では役に立たない。もう一回キャンプにいくときは、役に立つかもしれないけど、山の中での生活なんて5年に一回くらいだから、経験をいかす回数はあまりない。2か月間で経験をいかしてがんばったことといえば、「委員会」、「テスト」、「学級会議」の3つです。

(小6男子)

- ・ヒグラシのなき声で時間がわかるようになりました。
- ・トイレがあるのが幸せだと思いました。
- ・日がくれるのが遅いと思うようになりました。
- ・電気があるのが便利だと思うようになりました。

(小6男子)

キャンプでは、一步という言葉学びました。これからは一步を踏み出したいと思い、一つの一步を踏み出しました。それは、宿泊学習のことです。宿泊学習の解散式担当になりました。すごく緊張するけど、一步の言葉を思い出し、メンタルを鍛え、休みの日にたくさん練習しました。そして、本番は、見ないでしました。失敗なく大成功しました。また、一步を踏み出してみたいです。

(小5男子)

家はいいところ。アドベンチャーキャンプに比べたら快適。家を大事に使うようになりました。このアドベンチャーキャンプのおかげで、水や食の大切さがわかり、移動はすべて自分の足、車や自転車も日ごろはあるけど山ではない。それに背中に15~20Kgの重さの荷物を背負い、逃げたくても逃げられない状況で、仲間と協力し生活することができていろいろな大切さが分かりました。

(小5男子)

学校が嫌なままだけど、キャンプでがんばったことを思いだして、学校にいけるようにしている。前は、やる気がなかったけど、宿題を最後までやろうと思えるようになった。習いごと、やりたくなくて休みがちだったのが、がんばっていけるようになって、楽しくなった。大変なことを経験して、ちょっとのことではくじけなくなったと思います。これからも大変なこといっぱいあると思うけど、1週間のキャンプをやった自分を信じてがんばります。

(小5男子)



(保護者追跡アンケートから)



プログラム効果に関する保護者アンケート

アンケート実施 2025年10月
(保護者対象)

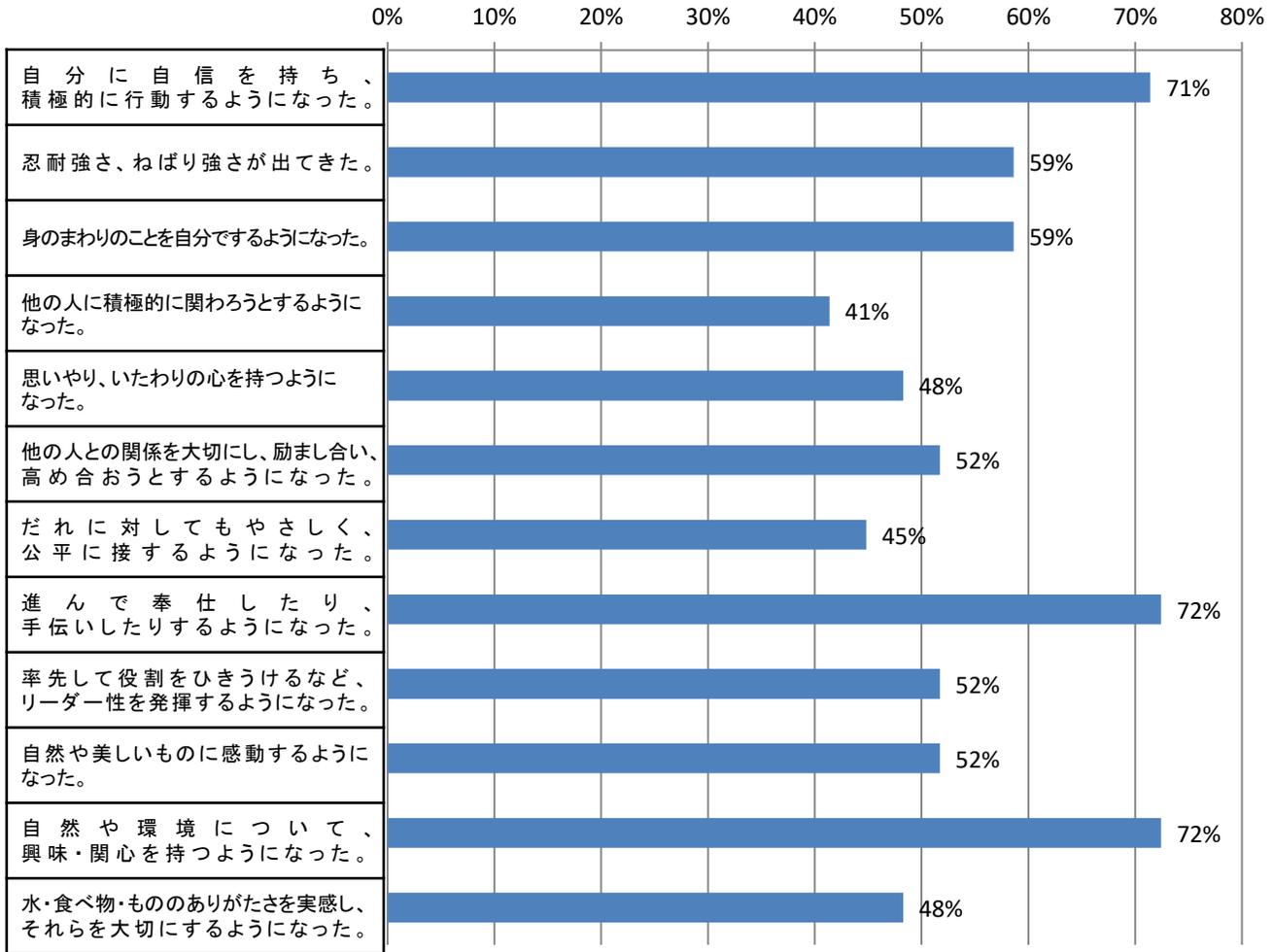
回答数・率
・やまぐちアドベンチャーキャンプ
(29/32人 91%)

プログラム終了後、2ヶ月が経過した時点で、「好ましい変化」が持続しているか。

Q1. この事業に参加したことで、お子様の考え方や行動に「プラス」と思われる変化はありますか？
(他者との比較ではなく、お子様自身の変化についてお答えください。)

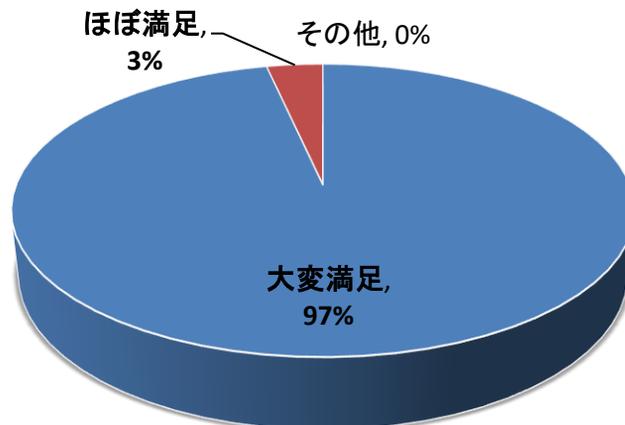
※「1 あてはまらない」「2 どちらともいえない」「3 あてはまる」の3段階回答のうち、**「3 あてはまる」と答えた方の割合**

やまぐちアドベンチャーキャンプ (2ヶ月後)



Q2. 今回のプログラムを振り返って、どう感じておられますか。(満足度)

「1 満足していない」「2 あまり満足していない」「3 どちらともいえない」
「4 ほぼ満足している」「5 大変満足している」 の5段階からの選択



保護者の感想～やまぐちアドベンチャーキャンプ～

現在中学3年生で思春期と反抗期もあり、よくロゲンカもありました。中一で部活をやめてからは何かに一生涯懸命取り組んだり、我慢強く粘ることからも逃げるようになり、親としてもこのままでは自立していくのが難しい気持ちもあり不安でした。キャンプに参加して激変とまではいかななくても、体育祭では応援団長をし、大きらいな虫の克服、すぐキレることも減りました。勉強面は相変わらずなんですけど、将来のこと、受験のこと悩んでいます。自分のことを以前より好きになったのではないかと感じます。ロゲンカも減ってきてるので、そこはとでも助かっております。

(中3女子の保護者)

キャンプが終わったあとも意外にクールであり多くを語らなかつたのですが、DVDと一緒に見てたくさん話をしてくれました。濃い8日間だったようです。もともと積極性も体力もある子なので大きな変化があったという感じではありませんが、よい仲間と過ごせ、色々な価値観の違いも感じたようでした。我が家の子3人ともこのキャンプに参加させていただき、3人とも強く思い出に残っているようですし、3人とも「また行きたい」と言っています。キャンプを主催していただいた県の職員さんやスタッフの皆様のおかげでこのような機会を頂くことができました。本当に感謝しています。親ではさせてあげられない体験をいただきありがとうございました。

(中3女子の保護者)

家族とはできない経験を積むことができ、感謝しております。今回は途中で発熱ややけどがあり、家に一旦帰ることとなりましたが、担当の方のあたたかいお言葉や同じグループの仲間みなさんのおかげで再び戻る事ができ、それも本人にとって良い経験となりました。ありがとうございました。キャンプから帰ってきてから大変なことがあっても「キャンプはもともと大変だったんだから」と言うことが時々あります。キャンプ中での体験が、日々のちょっとした困難に立ち向かう(乗り越える)力になっていると思います。ありがとうございました。

(中1女子の保護者)

普段、親に対しての八つ当たりが激しく、少しでも気に入らない事があれば、暴言を吐き、物に当たったりしていたが、キャンプ終了後から、人が変わった様に性格が穏やかになった。家族に対して思いやりを持った行動、発言を自身が考えて行動できるようになった。家事なども率先してするようになった。しかし、2ヶ月経過した頃から徐々に戻りつつあるような気もしている。とても貴重な良い体験をさせて頂き、感謝しかありません。ありがとうございました。

(中1女子の保護者)

少しほっそりとして帰って来ました。たくましくなった様です。次に行ったキャンプでも、自分で決めて荷物を持って行ってました。海だったので少し困ったようでしたが、あるなかで工夫した様でした。包丁の使い方も上手になっていました。キャンプの時、虫がいて、こわくてふりまわしてしまったと怖い事を言っていました。ありがとうございました。

(小6女子の保護者)

吹奏楽のマーチングの大会で下級生を励ます姿が見られました！放送委員長に立候補しました！自然やアウトドア活動が以前より身近なものになっていると感じます。思っていたよりハードだった点が本人の満足度5ではない理由とのことです。

◎自分のことは自分でやらねばと、言われなくても計画的に宿題をすすめたり、修学旅行の荷物の準備や段取りを考えたり等、少し成長した気がします。◎1つ年下の弟に、来年以降の参加を子ども自身が勧めています。(一生に一度の体験になるよ！等の言葉が出てきます)

◎途中離脱してしまいましたが、それでも仲間が待っていて受け入れてくれた安心感は、自分もし逆の立場になる機会があったら真似しないといけないねという話を数回しました。(今後別の場面でも同じような事がないとも限らないけど、スネたりあきらめたりせずに向き合えてよかったねー&その姿勢は大事だねーという話もしています。)

◎離脱後に戻れた事を少し誇らしく思っていると思います。

(小6女子の保護者)

アドベンチャーキャンプから帰ってきて数日間はキャンプでの様々な体験について話してくれていましたが、日々、色々な習い事などをこなす毎日で頭の中からは離れている様子でした。ただ、日々の生活の中で自分なりに“一歩を踏み出す”事にチャレンジしていると感じる事が増えた様に思います。劇的に変化はないですが、どこかで迷ったり、悩んだり、困った時に支えてくれているのだと思います。これからの人生においてこの体験は必ず力になるものと感じています。本当にありがとうございました。

(小6女子の保護者)

とても強くなって帰ってきました。このキャンプは自然と本来の向き方をしていると思います。主人も子どもの頃参加し、長女も参加させていただき、今年は次女でした。山への関心や、山でどう過ごすかをこのキャンプを通して一生役に立つ姿勢を学べたと思っています。小1の弟にも絶対に参加してほしいです。続けることは大変だと思いますが、この山口県で続けているキャンプが末永く続いてくれることを願っています。

(小6女子の保護者)

きっと大人になっても頑張った日の事、友だちと協力して過ごした日を思い出したいと思います。また、人間関係で辛い時もキャンプで一緒に過ごしたお友だちの事を考え、小さな世界ではなく大きな世界を見てほしいなと思います。

(中1女子の保護者)

キャンプ後から、「キャンプに比べたらこんな楽」と本人にとってめんどくさいことや、努力が必要なことに対して「あの時と比べたら大丈夫」と思えるようになっていよう。『何かが大きく変わった』という目に見えた変化はありませんが、7日間頑張ることができた自分自身を誇りに思っているように見えますし、自信になったように思います。参加中、クライミングで降りられなかった時、くまさんや仲間にも助けてもらった話、リーダーで頑張ろうとしたけどみんなが動いてくれなくて困ったこと、山できつすぎて進めなかった時に、人に頼ることも大切だと声をかけてもらったことなど、心の動く経験を多くさせていただけたと思っています。日常では体験できない貴重な体験を、安全面にも配慮していただき、計画、実施していただきましたスタッフの皆様には本当に感謝の気持ちでいっぱい。ありがとうございます。親にとってもよい経験になりました。(くまさんからの話でたくさん泣きました)写真も楽しく拝見しました！ありがとうございます。

(小5女子の保護者)

自分で料理をする機会が多くなったと感じています。家の手伝い(掃除)等に関しても、今までよりも回数が増えたように感じます。また、虫も苦手でしたが、自分で駆除することができるようになりました。

(小5女子の保護者)

「とにかくすぐきつかった。毎日きつくて泣いた」と言っていたことが印象的でした。あまり大変な思いをしたことがないので、今回のキャンプを乗り越えたことが、今後の自信につながると感じます。それと、初対面の子達と関わることも日常ではあまりないことなので、人間関係を自分からつくっていくことにも挑戦しようという気持ちが育った気がします。普段からよくお手伝いや弟の面倒を進んでしてくれる、いいお姉ちゃんですが、やったことのないことにもチャレンジしたい気持ちが高まっているような気がします。

(小5女子の保護者)

点ではなく線を意識して動けるようになったこと(次何をするのかとか〇〇をするために今のこの動きが必要だとか)。自発性が身についてきたこと。自分の意見を人に伝える機会でも臆することなく自分の言葉を発せられるようになったこと(人見知り、場見知りの軽減)。粘り強さがでてきたこと(継続力、挑戦力、不屈力が養われた)。「やればできる」「よし、やってみよう」という邁進力がでてきたこと。そして、やってみなかつたら何も得られなかったということに気付いたこと。素晴らしい贈り物でした。体験させてくださり、ありがとうございます。

(小5女子の保護者)

今回、キャンプを完走したことで、体力や体を使うことに対して自信を持つことができたようです。学校の宿泊訓練も、「キャンプに比べたら全然余裕！」と自信満々で参加できました。家族と離れてすごしたことで、ありがたさに気づいたようですが、反動でさみしがり、甘えん坊になった部分があります。これからどのように変化していくのか、見守りたいと思います。同じ班のお姉さんと住所を交換し、文通をしています。スマホ、SNSがメインの時代に、手紙を送りあえる友達ができたことは、親としてもうれしく思っています。このような経験をさせていただき、感謝しております。

※今回一緒に参加したメンバーとまた会えるような機会があれば、お互いの成長した姿を確認し、また学びを得ることができるのではないかと思います。

(小5女子の保護者)

- ・アドベンチャーキャンプ終了直後の昼食で、炊き立て白ごはんに感動して涙していた。
- ・助けてくれた班メンバーへの感謝
- ・「あたり前の生活」が送れる事への感謝
- ・3泊目以降から素が出る！それまではほとんどしゃべらなかつた子が自分語りをはじめたり、暗いイメージだった子が実はとても明るかったと分かったり。2泊3日なら、なんとか自分が我慢して耐えられる事が限界になったり。メンバーとの絆や、強い信頼関係は3泊以上ってこそそのものだと思う…と言っていました。
- ・大人は①はじめにやり方を全部教えてくれる→②手も口も出さずに見守る※親はすぐ手も口も出したくなるので…対応含めてスタッフの方々本当にすごいと思いました。→③本当に危険と判断した時には助けてくれる、迷いそうな時は現在地を教えてくれる
- ・「今自分に出来る事は何か」を意識して考え、行動する様になった(キャンプ中、何をしたらいいかわからずにつっ立っていた時に「みんなは動いてるよ。葉香はどうするの?」と声をかけてくれた、さえ吉さんの言葉が今も心の中にある、すごく残っていると言っていました。

足りない環境に身をおく事で「足るを知る」ことが出来る素晴らしいキャンプだと思います。大変な事もたくさんあった様ですが、そのおかげで「あのキャンプを乗り切ったんだからこれくらい大丈夫！」とどっしり構えられる様になっていると感じます。

先週1泊2日の宿泊学習があつたのですが、周りが「ドライバーが使えない、どうしよう」とザワついている中、娘は「屋根と壁がある所で寝られるなんて最高♪(もちもの)タオル3枚?私バンダナ1枚あれば十分だけど」と言っていて…たくましいな…これもアドベンチャーキャンプのおかげだなと思いました。りんさん、むーむーさん、さえ吉さんをはじめとして、アドベンチャーキャンプに関わるすべての方々感謝しています。

(小5女子の保護者)

応募しつづけて最後の年に参加することができ、本当によかったと思っています。最初は参加することを嫌がっていましたが、説明会に参加して行く気になってくれました。こんな経験はなかなかできることではありませんし、本人にとってもやりとげた自信につながっているなど感じます。帰って来た日の夜、「洗い物手伝おうか？」と自ら言ってくれて、今までの様子からは考えられない言動だったので思わず涙があふれでてしまいました。思春期の反抗的な態度がなくなり、甘えてくるようにもなり、素直さが戻ってきたのをすごく感じます。受験も推薦を希望しており、面接や小論文でキャンプに参加したことで成長できた強みをアピールできるので、本当に良い経験をさせてもらいました。引率の先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。本人も参加してよかったと言っています。これからの人生の糧になることまちがいないです。夢に向かってがんばってほしいと思っています。

(中3男子の保護者)

友人を誘って積極的にあそびに行ったり、自転車までこまでも…
「〇〇は病んでるみたいなのであそぼうと声かけてみよう」といった思いやり？のある発言をするようになりました。今度、中学校の生徒会長にも立候補するそうです。キャンプのおかげかもしれません。チャレンジするその気持ちが大切ですね。大変お世話になりました。

(中2男子の保護者)

息子からの話を聞くと大変だったみたいですね。良い経験をさせていただき感謝しています。知り合いや親戚とキャンプについて話をしている話題にあがったのですが、「たくましい山口っ子」の称号をぜひ授与していただきたいです。ひょっとしたら、まだまだ「たくましい山口っ子」には及ばないのかもしれませんが、親世代の誰もが知っている「たくましい山口っ子」の称号がある事で、子供の話題になり、褒められることで自信に繋がります。ぜひ「たくましい山口っ子」の称号を授与して欲しいです。お手数ですがなにとぞお願い申し上げます。将来履歴書に書くことを視野に入れています。

(中2男子の保護者)

9月に家族で大阪万博に行ってきました。想像以上に人が多く、ほとんどのパビリオンには入れませんでした。親としては、段取りの悪さに不甲斐なさを感じていたのですが、その時に、子どもが「こういうところって、パビリオンに入れなくても、変わった建物や色んな国の人を見るだけでも楽しいよね」と言ってくれました。どんな場面でも楽しさを見つけられる姿勢は、とても素晴らしいとこだと感じますし、キャンプに参加させていただいた経験が、こうした前向きな考え方を育ててくれたのではないかと感じました。万博でもキャンプでも非常に貴重な経験をさせていただけたと思います。本当にありがとうございました。

(中1男子の保護者)

7日間のキャンプから戻った子供は、うち満ちた清々しい顔をしていました。「充分やりきった。大変だったけど、最後までできてよかった」と申しました。前はクマの為に途中で中止となったわけですが、本人「また来年応募してみようかな」と申ししていたものの、親としては半信半疑でした。ですが、一年経って本人の意思を確認したところ、「これから先、部活や勉強で忙しくなるかもしれない。行けるチャンスの際に応募してみよう」となり、連続ではありませんが応募致しました。結果、やはり参加して良かったです。閉会式の時に担当の方が涙ぐんでいらっしゃいましたが、それが全てを表しているなど思いました。子供も大人も全員頑張った！！私も泣きそうでした。「また皆に会いたいなあ。すごく疲れたけど、とても楽しかった」と。良い仲間にも恵まれたようです。

(中1男子の保護者)

キャンプから帰ってきた息子は、「お腹いっぱい食べられる有難さ、ふかふかの布団に包まれる幸せ、温かいお風呂は、はあ～最高！」と普段の生活のひとつひとつを噛みしめて幸せを感じていました。そして過酷な自然の中で支えてもらった友達、自分たちが寝た後も、疲れているはずなのに夜中まで自分たちの見えないところでもサポートしてくれた人たちの存在(息子が、一生懸命サポートしてくれたたっつーさん達の姿に、大きな何かを感じ取っていました。)これからの毎日の生活では得られない一生の財産となっています。送って頂いた写真を一緒に見ながら、息子には、「このキャンプを心から楽しんで過ごしたんだから、この先の人生、どんなことがあっても乗り越えていけるよ」と伝えました。そして私たち家族も皆様から頂いた刺激と感動は忘れません。ありがとうございました！！

(中1男子の保護者)

気持ちの伝え方が良くなったと思います。後日、富士山登山もしたのですが、おかげ様で弱音をかくこともなく登頂でき、用意も持ち物の管理をきちんとできました。考え方もずいぶんと前向きになり、キャンプに参加させていいことばかりです。帰って来た時は「もう参加しない」と言っていたのですが、しばらくすると「今回はわからないことばかりで、もうイヤだなあと思ったけど来年も参加して、今度は経験をいかして皆を助けたい」と言っていました。先生方にとっても感謝しています。ありがとうございました。

(小6男子の保護者)

今までは1人で行動することが少なかったがキャンプ後は“自分で行動”することが多く、自立していると感じます。

(小6男子の保護者)

十種ヶ峰が大好きになり、9月のキャンプに参加した。登山がやりたい、野宿がしたい、家族でキャンプがしたいと言っている。来年もぜひ参加したいとも言っています。「班のみんなに会って話したい」と何度も言っています。

(小6男子の保護者)

キャンプから帰って数週間は、自ら家の手伝いや、食事をありがたがって食べてくれた。ログセが「キャンプに行って、挑戦することの大切さを学んだ」と事あるごとに言い、今まで避けていたような、希望制のコンクール(英語で発表)などにも「やってみる！」と挑戦するようになった。また、学校で十種ヶ峰の1泊2日キャンプのお知らせを持ち帰ってきたとき、「またキャンプに行ってみよう！！」とすぐに応募し、9月27,28日のキャンプに参加するなど、積極的になった。一方、時間が経つと、自分のことはするが家族のための仕事に取り組む回数は減って、その代わりゲームの時間が増えたので、そこは家でのルールをしっかりと話し合っ決めていきたいなど反省しています。先週、小学校で面談があり、キャンプのことを話すと、担任には話していなかったようで、びっくりされていた。どんな内容だったか、色々とお話を聞かせてください。学校での様子は、低学年にやさしくそうじの仕事を教えたり、「ぞうきんの人は2人、ほうきの人は1人、机を上げるのは廊下側からやってー」と、6年一人で6人の下級生たちに指示を出せるようになったと話していた。また、以前なら、絶対に、参加しなかったであろう、学校運営協議会も「やってくれる人ー」と先生が全体に声かけしたところ「やってみようかな」と立候補し、地域の方と「15歳の理想の姿」というテーマでどんな大人、地域にしたいかなど話しあい、自分の気持ちを伝えることができた。クラス担任から「道徳の時など、ハッとする視点から意見を言ってくれて、話しがクラスで盛り上がるキーパーソンです」と話していただき、家や学校でも自己表現ののびのび、そして「挑戦してみる」というキーワードが本人の軸となっていると感じています。参加させてよかったです。あと、荷物の準備が2倍速くらいの早さで早くなりました。兄(中3)も「参加してみたい」と話していました。私も、息子の成長の姿を見て、子どもとの関わる残された時間を大切に、一緒にチャレンジしていきたいなと思いました。

(小6男子の保護者)

参加が出来るか、本人も親の方も、青少年の家でのお別れの瞬間まで不安でしたが、最後まで行けたことは、本人にとっても、私達にとっても大きな自信につながりました。「こんなことが出来るんだ！」「乗り越えられたんだ！」「すごい！」と感じました。キャンプから戻り、9月から学校や習い事の日常が再開し、色んなことにチャレンジをする、前以上に前向きな積極的な姿が見られます。7日の間についた自信が背中を押してくれていると思います。先日も、お風呂あがりに「当たり前で水が使えるって、有り難いことなんだよね…」と言っていました。キャンプに参加しなかったら、なかなか11才の今の生活で感じられることではないと思います。

(小6男子の保護者)

今回子どもにキャンプを薦めたのは、自分に自信がなく、チャレンジすることに消極的な姿勢が気になっていたからです。キャンプ終了後は生き生きとした姿をよく見せてくれるようになりました。朝起きることが苦手だったのが、自分で目覚ましをかけ、きちんと起きるようになりました。0歳の弟には以前はあまりしなかったお世話や積極的に声かけをするようになりました。熱が出て離脱してしまったときは、待っていてくれた仲間みんなやスタッフの方々のおかげで戻ることが出来て、本当に感謝しています。本人は来年は必ず全部のプログラムをやりたい！！と意気込んでいるので、がんばって欲しいと思います！！

(小5男子の保護者)

参加させて良かったです。本当にありがとうございました。大きな変化はありませんが、忍耐力がついて嫌なことのハードルが下がったためか、頑なに拒否することが少なくなりました。学校に行かない日を決めていましたが、参加後、徐々に減っていき、毎日行けるようになりました。それに伴って、表情も良くなっているように感じますし、担当の先生からも学校生活を楽しく過ごしていると伺っています。これらのことから、本人の自信に繋がっていると思います。たくさん先生方の見守りサポート体制があり、安心して預けることが出来ました。大変お世話になりました。

(小5男子の保護者)

このキャンプに参加して、子供が変化したことは、より自分に自信を持つようになったことです。自信を持てるのが次に何かをするステップになるということです。キャンプに参加して、自分が体験することにより、確実な強い自信を持っているように思います。子供本人がアンケートにも書いてある通り、学校の宿泊学習で解散式のあいさつのなり手がいなく、なぜか指名されました。みんなの前で大きい声であいさつをしないとイケないので大丈夫かなと思っていましたが、気持ちをきりかえて、何度も練習し、友達の応援もあって無事にできたそうです。キャンプに参加したことによって、人とのつながりや、自然の大切さ、いろいろなことに挑戦するのが身についたのではないかと思います。この度は関わってくれた、お世話していたいただいた方々に感謝します。ありがとうございました。

(小5男子の保護者)



指導者の育成

山口県野外教育活動

指導者研修会



令和7年度 山口県野外教育活動指導者 研修会前期日程修了にあたって

内田 依見（防府市立華城小学校 十種ヶ峰青少年自然の家 長期研修教員）

「人に迷惑をかけてはいけないと思っていた私が、人に迷惑をかけてもいい、その代わりに人を助け許そう」そう考えた。今までの私は、「助けて」「辛い」「待って」が言えず、「人に迷惑や心配をかけてはいけない」と思っていた。迷惑をかける自分は人から好かれなかったと思っていたし、一方で周りの人のちょっとした言動が許せないこともあった。しかし、この指導者研修会で、「迷惑を掛け合いながら、助け合いながら人は生きている」ということに気付いた。

参加する前に私は「自分の病気のことをきちんと先に話そう」と思っていた。今まで関わってきた人に自分の病気のことを詳しく話したことはなかった。しんどくても「大丈夫、できるよ」と答えていた。参加者の7人に会い、初日の自己紹介。心配なことをもえちゃんに話した。話を真剣に聞いてくれて、どんな話だったかもえちゃんはみんなに伝えてくれた。この時からみんなが体調のことを質問してくれて、知ろうとしてくれたことが何より嬉しかった。ここでなら頑張れそうと思えた。強がりの自分が少し弱さを出せた瞬間だった。

毎日の山登りは本当に苦しかった。息もできず、心臓がドクドクと鳴り、話すこともできなかった。一歩を出すのに必死で、すごく遅いスピードだった。そんな私を見ても、誰もせかしたり、イライラしたりせずに、みんな同じ速さに付いて来てくれた。それどころかみんな「ゆっくりでいいよ」「自分のペースで」「どんな感じ？」と励まし、気遣ってくれた。弱い自分を出しても受け入れてもらえると思え、安心した。たっけが最終日に読んでくれたリーディング集の中の言葉に、「よい友情とは、対等な関係のことです。やりたいことを一緒に決められる。なんでも平等にわかちあうことができる。おたがいに信頼しあえる。どんな問題も、力を出しあっていっしょに乗り越えられる。いいときも悪いときも、頼りあえる。」という言葉があった。スッと自分の心に入ってあの時のことだなと思えた。

山を歩いて気付いたことは、「少しずつでも進めばゴールに近づくこと」だった。「あの坂まで行こう」「あと5分で休憩しよう」とみんなで声をかけあい、正直な体調や気持ちを伝え合った。少しの目標を達成し進んでいくことが大きな目標を実現するために必要なのだと体験を通して学んだ。これまでも「少しずつでいい」ということは思っていたが、それは頭のどこかで自分に言い聞かせていたのかもしれない。でも、今の私にはそれを裏付ける経験があって、あの道のりを少しずつみんなでお互いに励まし合って進んだこと。できるかわからないことをみんなでチャレンジしたこと。体験学習が大切にされる理由には、これまで何となく思っ

ていたことが自分なりの形で理解し、自分自身の記憶に残り続け、自分に自信がもてるようになるのだと気付いた。

2日目の夜、自分のハイポイントとローポイントを話した。その後、「チームとして大切にしたいこと」、チームの目標を話し合い、「正直・本音・安心感」のキーワードに決まった。自分の気持ちに正直になり、本音を言っていること。その正直や本音を言う際には、言葉に気をつけること。話をする中で8人のチームの目標が明確になっていった。チームの目標が決まってからは、8人それぞれがどの活動においても「どうしたら安心できるやりとりになるか」ということを考えながら行動することが増えた。3日目の振り返りでは、「自分はチームの目標に対して何パーセントくらいの達成率か」を話し合った。0パーセントや10パーセントなど低い人もいた。周りの人はそう思っていないけれども、本人の中で考えていることがあるのだと改めて思った。言葉にして表に出すことの大切さを学んだ。その数値をきっかけに本音を話して、周りの人は聞いてどう思ったかをコメントで伝え合った。社会人になり、チームが成長していく過程を見ることはあったが、自分がチームの一員になり、毎日関わって一からチームを作っていくという経験があまりなかったことに気付いた。チームを作っていく上では、やはり「自分のことを話し、それを聞いてもらえる対等な関係」が安心感につながると思った。自分も含めてとても大切でかけがえのない存在であり、その価値をみんなで尊重していこうというフルバリューの考え方を実感した瞬間だった。

危機管理では、伝達方法について吟味することが多かった。登山のときには、危険な箇所を通過するときに自分の後ろの人に、右、左などの位置や石、枝、根っこなど何があるかを具体的に伝えるということが大切だと気付いた。反応がなかったり、遠かったりして伝わっていない様子がなければ確認することなどを徹底し心がけた。登山もマウンテンバイクも、反応の声の大きさ、声色などから、直接相手の顔を見ることができない状況であっても相手の体調などを把握する方法の一つになると学んだ。

子どもたちには、他者との関わりの中で自己を見つめ直し、他者と生きる良さや楽しさを見つけていくことを欲しい。そのために、体験学習を通して、ふりかえり、新たな気付きや目標を見つけ、行動するという体験学習サイクルを意識した活動を組んでいきたい。「一歩を踏み出すこと」は、自分が決めることができ、踏み出したからこそ感情が動くことが多い。仲間の姿を見て一歩踏み出せることも多くある。これから子どもたちの可能性を信じ、子どもたちが安心して日々チャレンジできるよう、笑顔で支える教員でありたい。

大浴 一航 (宇部市立東岐波小学校)

本研修を受講し、以下の点について学び、考えを深めることができた。

○各フェーズの役割

本研修は、他の様々な研修と比較にならないほど過酷であり、だからこそ様々なことを考え、体験することができた。そこには、トレーニングフェーズ、エクスペディションフェーズにてチームの仲間と共通の課題をクリアし、自分を見つめ直し、ファイナルエクスペディションフェーズにてチームビルディングを完成させ、コンクルーディングフェーズにて個人の挑戦へと繋がるという段階設定が大きく影響しているように感じた。中でも自分は、ファイナルエクスペディションフェーズの大きなチームチャレンジと、コンクルーディングフェーズの個人的な挑戦の差別化に大きな意味があるのではないかと考えることができた。本研修はソロを除くほぼ全ての時間をチームで過ごすため、以前はチームビルディングを中心としたプログラムであると考えていた。しかし、ファイナルツアーでのチームビルディング完成後のサイクルマラソンを通して、それぞれの日常へ帰ってゆく孤独感や、チームチャレンジでの成果やチームビルディングの充実感を、ただの思い出としてではなく各個人の学びとして持ち帰るためにコンクルーディングフェーズがあり、プログラムの最後に位置付けられているのだと分かった。

○ソロの時間の意味

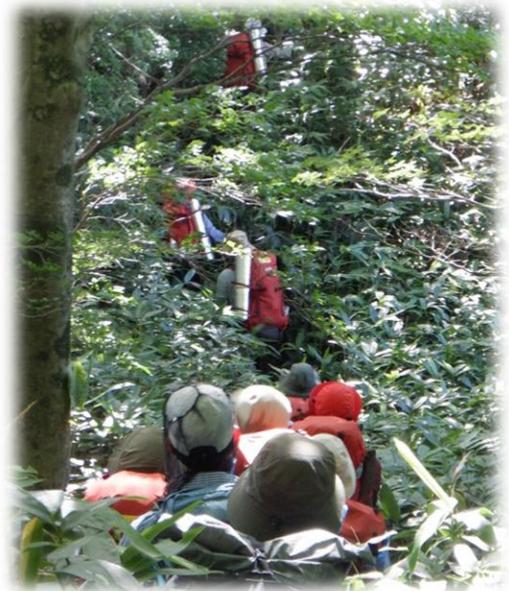
前述の通り、本研修はソロを除くほぼ全ての時間をチームで過ごすため、活動やそのための思考もチーム全体の動き(時間配分や細かい活動設定など)が中心となる。しかし、それまでのプログラムから一転してソロの時間が設定され、急に1人の個人という単位に戻った時の戸惑いを覚えている。拠点作りや周りの掃除、食事の時間の設定など、全てのタスクを自由に設定でき、創意工夫を個人に委ねられる感覚は、少しの戸惑いと高揚感を感じた。ソロの時間はそれまでの身体的、時間的にもシビアだったプログラムから一転し、激しい運動も、時間による制約もなく、多くのことを思考しながら身体を休める活動となった。今の生活の中で、教員はもちろん、子どもにとってもそういった時間を確保する事は非常に難しい。だからこそ、日常や時間と切り離されたソロの活動の中で、自分自身のこれまでとこれからを見つめ直したり、周りの人間関係や様々な物に対して感謝の気持ちを持ったりするなど、普段できそうでできない思考が可能になるのかもしれないと感じた。

○学びの獲得と安全管理

本研修中、ファイナルツアー1日目において、チームが想定していたコースから離れてしまい、元のコースに戻れないまま日が沈み暗くなるという事態が発

生じた。心身ともに疲弊し、チーム的にも個人的にも限界を迎えている最中、インストラクターの上野剛先生と富岡温子先生が救援に駆けつけてくださり、ゴールへのコースに乗ることができたが、辺りが暗くなり、倒木などによって前進することが困難となり、谷の中で夜を明かす(ビバーク)をするかどうかという判断のタイミングもあった。上野先生はギリギリまで悩まれていたようだったが、本部スタッフの協力もあってその日の野営場所までたどり着くことができた。ファイナルツアー終了後、各フェーズの意味と前日の立ち回りについての話を聞くことができた。参加者には最大限の挑戦(肉体的、精神的冒険)をしてもらいながらも、見えないところでしっかりと安全管理を行うことが最重要であり、それを見えないように挑戦を確保することがとても重要であると学ぶことができた。道に迷っているときはチームでの挑戦の機会でもあり、同時に、多くのリスクを伴う状況にも陥ってしまうため、安全を最優先しながらも、最大限の学びを確保することの大切さを学んだ。子どもたちの前にスタッフとして入った時に、子どもたちの学びの機会を奪ってしまうことがないよう、立ち回りや距離感、関わり方について常に自分を見つめ直しながら考えていきたい。

本研修での学びを、ただの思い出とするのではなく、日頃の学級経営や、第Ⅱ期のアドベンチャーキャンプに生かしていくために、本研修の内容や自身の気づきを反芻し、今後の糧としていきたい。



恩塚 祥平 (周南市立今宿小学校)

8泊9日の研修をチーム8人でやりとげることができた達成感がとても大きいというのが最初の感想である。8人の内4人は昨年度中止の知らせを受け、途中までの参加となったメンバーである。今年度初参加の4人と力を合わせて研修をスタートした。

最初の2日間はトレーニングフェーズとして、パッキングの仕方、山の歩き方、コンパスや地図の使い方をイントラから教わりながら登山を行った。昨年は5人だったため、同じ活動でも様々な違いを感じた。まずは荷物が軽いということである。これは非常に嬉しい違いだった。テントやタープを立てる際や食事の準備なども、人数が多いため分担して作業を進めることができた。反対に、人数が多くて困ることもあった。それは、登山中縦一列に並んで歩くのだが、前半後半で声をかけにくいことだ。前後の状況がそれぞれ分かりにくいことは、精神的な負担となり、歩きにくさにもつながった。道中、他愛もない会話をしたり、しりとりをしたりして気を紛らわしながら歩いていると不思議と疲れを感じにくくなった。気を紛らわすことも必要なことだと思った。

エキスペディションフェーズに入った3日目では、イントラは少し離れた位置で見守り、自分たちの力で目的地まで向かった。峠に向かうため急な下り坂があるのだが、そこもチーム8人で協力して下りきることができた。これまでのミーティングで「本音・正直・安心感」をチームの目標としてきた。ここまでは昨年度体験した内容だったが、これから先の日程は初めての挑戦である。4日目のソロは1人の時間を有意義に過ごした。指導者研が終わってからの自分の目標、チームの目標について考えることができた。

ファイナルエキスペディションツアーでは、自分たちの力だけで活動を行っていった。まずは十種ヶ峰山頂を目指して出発した。5日目のソロ明け、フルーツパーティーを済ませ、徳佐の町中を歩いた。日差しは強かったが途中の休憩所でスタッフの皆さんに水をかけてもらいながら楽しく歩き続けた。予定通り昼食も済ませいざ入山。県境までの急な上り坂もみんな道を開きながら進んだ。県境も無事時間通り到着することができた。しかし、そこから楽しかった時間とは一変し、道に迷ってしまった。県境を進んでいたはずがいつの間にかルートをそれていたのだ。その時は、コンパスの針が少しずつれていたが自分は声に出さずにいてしまった。その結果、谷の方へ降りてしまい、現在位置がわからなくなってしまった。水や体力も尽き、日没までの時間というタイムリミット、このまま帰れなくなってしまったらどうしようという焦りから、チームが崩れそうになった。しかし、お互いに声を掛け合い、言葉を選び、作戦を立て直していたところにイントラの迎えが来た。ほっとしたのもつかの間、下山するための準備を進めていたが、帰れるという安心感からか、思うように下山できず、山の中で夜の

8時を迎えてしまった。

道なき道をヘッドライトのわずかな明かりを照らしながら進むのは怖かった。ザックを椅子にして一夜をあげようかと話し合っているところに他のスタッフの声が聞こえてきた。この時ばかりは覚悟を決めていたが、スタッフの皆さんのおかげで、なんとか峠までたどり着くことができた。大変な思いをしたが、チームがより強くなったことは肌で感じることは自分だけではないと思う。

翌日は、先日の反省を活かして十種ヶ峰山頂を目指した。途中すれ違う子どもたちの頑張る姿に勇気を分けてもらいながら山頂へ辿り着くことができた。2年越しの山頂の景色はとてほおびた気持ちがよく、子どもたちやスタッフも集合していたため、大賑わいとなった。

7日目はロックサイトでロッククライミングを行った。これまでは自分がクライミングすることに楽しみを感じていたが、仲間のために応援したりビレイをしたりすることの方が有意義だったと感じる時間だった。これは、チームとしての結束力があってこそ味わえるものだろうと思った。

8日目はコンクルーティングフェーズとしてサイクルマラソンに挑んだ。嘉年体育館を8人で出発し、萩市にあるハピネス福栄という道の駅を目指した。8で行うサイクルツアーは居心地が心地よく2時間ほど楽しくマウンテンバイクを運転した。

ハピネス福栄からは一人ひとりが自分のペースで十種ヶ峰自然の家を目指すサイクルマラソンを行った。出発していきなりの上り坂に心折れそうになりながらも挑戦を始めた。途中のチェックポイントでは、みんながメッセージを書き込めるボードが設置されていた。通過する際に、前の人のもので読んだり、後からくるチームメイトのために書き残したりするのである。挑戦自体は自分1で行うが、チームのみんなが心の支えとなり、終わりの見えない峠の上り坂も自転車で登りきることができたと思う。「〇〇もきっと頑張っている。」そう思うことができたのは、みんなで目指した「正直・本音・安心感」のあるチームだからこそだと思った。

正直、最初は昨年の経験もあり、この研修会への参加はあまり乗り気ではなかった。しかし、8泊9日を終えてみると、あつという間だったなど感じることもできた。それは、目の前のことにただ一生懸命に取り組んできたからだと思う。そして、チームのみんなやスタッフのみなさんに支えられたからこそこの達成感だとも思うので、心からの感謝を述べたい。ありがとう。



倉永 綾香（宇部市立黒石小学校）

今回、3回目の挑戦となり、絶対に8泊9日を完走したいという思いで挑みました。前年度の29期の4人に加え、4人の新メンバーの8人での研修が始まりました。昨年度の経験もあり、どこまで自分たちが知っていることを新メンバーの4人に伝えていっていいだろうか。この差が仲間関係に影響が出てしまったらどうしようと心配のスタートでした。

1日目、これまでの経験をもとに前日しっかりと睡眠をとり、朝食もしっかりと食べたことで今までの違いしっかりと活動に参加することができました。やはり身体をより良く、健康的に過ごすためには、睡眠と食事が大切だと実感しました。

2日目、いよいよ登山が始まりました。前日のミーティングで筋ヶ岳の2つのルートの内、最初に急な登りに挑み、その後はゆっくりと進む順路となりました。最初にイントラさんに教えてもらっていた20分歩いて、3分休憩するサイクルを細かく入れるよう意識してきました。そうすることで、急な登りも順調に登ることができました。問題は下りでした。仲間の何人かが下りが怖くてなかなか上手く足を地面につけて下ることができませんでした。前後のメンバーが声をかけたり、手を取り合ったりして何とか仏峠までたどり着くことができました。自分はその時、ふと「去年はもっと早く着いたのに。」と後悔していました。その日の夜のミーティングで、昨年度と同じメンバーが、このままでは、去年と今年の新メンバーとの溝が出来てしまうのではないかと気づきを言ってくれました。自分はその時、到着した時に思ってしまったことをすごく後悔しました。前日のミーティング時に自分自身が「8人全員で完走したい。」と言ったにも関わらず、自分で去年と今年を比べてしまっていました。今年は今で新たなチャレンジだと気持ちを入れ替えて挑まなければいけないと気づくことができました。また、8人で「正直・本音・安心感」という目標が決まり、心機一転、8人のために行動していこう誓う夜になりました。

3日目、3日目も順調に登り進めました。下りに入り、高岳の5合目から0合目を目指して歩くところは、沢を横切るため非常に危険でした。前回の経験者が列の合間に入ろうということになり、自分は一番後ろに行きました。みんながおり進める時に、サブイントラさんから「また後ろじゃない？」と声をかけられました。自分は、はっとしました。この3日間一度も前列に行っていなかったことにその時気づきました。自分の力、周りの力をつけるにも色々なポジションを経験することが大切だとその時気が付きました。無事に0合目についてからQVに向かう道は、これまでチームを崩壊させてきた道だと聞きました。その中、自分は先頭に行くことになりました。後ろを気かけながら、早く行かないよう気を付けて歩くのは何てキツイのだろうとその時初めて知りました。今まで後ろについていただけだったのだと自分が情けなかったです。

4日目、ソロに入りました。今まであんなに賑やかだ

ったのに、誰も周りにいない、一人の時間でした。その間に、みんなへのサクスや自分のこれからについて考える時間がゆっくりととることができました。5日目にみんなに再会した時、正直すごくホッとしました。それだけ仲間の存在に救われてきていたことを気づくこともできました。

5日目は、8人だけで地図を読んで進むことになり、久しぶりのコンクリートのゴールは別世界にいるようでした。そして再び山に入り、誤って谷に下りてしまいました。その時、一人のメンバーが「横切れば行ける。」と言いました。自分は正直、迷っているから戻りたいと思っていました。しかしそのことをちゃんと説得できず、結局流されてしまいました。やはり自分の本音を伝えることの大切さ、難しさを実感しました。

6日目は、前日の反省を胸に、全員で細かく地図を確認し、迷ったら戻って確認をすることを実践しました。そしてついに、十種ヶ峰の山頂にたどり着くことができました。4年分の思いが一気に溢れてきた瞬間でした。あの山頂の景色は今までの山頂の景色とは比べられない程、綺麗で、熱い気持ちが湧き上がりました。何より8人全員で見られて良かったです。

7、8日目からはマウンテンバイクに代わり、山歩きとはまた違った難しさがありました。ロッククライミングでは、最初にビレイヤーをしました。仲間の命を預かっているロープを持つのは身体的だけでなく、精神的にもくるものがありました。絶対に失敗できない緊張がありました。その後、挑戦者になり自分が登る時は、不思議と不安な気持ちはなく、むしろ安心して登れました。それだけ仲間に対して安心している信頼していると感じました。8日目のサイクリングマラソンは、8日間で一番辛かったです。どこまでも続く坂道、孤独との戦いでした。そんな時、ポイントに置いてあるみんなの寄せ書きが何よりの力になりました。

9日間無事にやり遂げることができたのは、7人のメンバー、全力で自分達をサポートしてくださったスタッフの皆さんのおかげです。絶対に一人では無理でした。「仲間がいれば、諦めなければ成し遂げることもできる。」このことをこれから子どもたちに伝えていきたいと思います。そして、教員として、野外教育活動の指導者として力を付けていけるよう励み続けていきます。



五嶋 千陽 (下関市立文関小学校)

8泊9日間の野外教育活動指導者研修会を終えて、自分自身で経験したからこそ得ることのできた学びがたくさんあると感じています。大学生の頃に、山に関わっている方から、この研修を紹介していただいてこの夏に30期として参加できたことをうれしく思っています。

「個人とグループの成長を支える人間関係」については、この9日間を過ごす中で重要なものだったと考えています。

研修が始まってから1～2日目は、全員が一生懸命に取り組んで関わろうとしていたのですが、仲間との関わりの中で何とも言えない壁がありました。一人ひとりが仲間を気遣いすぎてしまっていて、2日目の筋ヶ岳～弟見山～仏峠の最後の下りでは「みんなにここでしんどいって伝えたら負担を掛けてしまうかな？」と自問自答していたときもありました。夜のミーティングで、勇気を出して思いを共有できた時に、仲間から「涙を流してでも辛い時は辛いって言っているんだよ。」という言葉もらい、自分の思いを受け止めてもらったことに安心感を覚えました。グループ(チーム)として成長していくために、誰か特定の人の意見ではなくて、全員の意見を出したうえで納得解を導き出して行動に移していくことが重要なのだということを学びました。(例:毎日の役割決め、歩く順番、歩く速さ、進むルート、グループとして目指す姿など)

特にグループとして、成長したな変わったなと感じた場面は、3日目の桐ヶ峠～高岳山の0合目まで下りていく時でした。桐ヶ峠から下山する最初のところで、ロープをつたって渡らなければならないところがあり、グループの中の一人が恐怖心を抱いていました。その時に、みんなが同じ方向を向いて励ましたり、「こうやって渡ったらいいよ。」とアドバイスをしたり、無事に渡ることができた時には「ナイス！」と一緒に喜びを共有できたところがグループとして一つ成長できたポイントだったと思います。

「目標設定」については、チームをよりよくしていくためにミーティングで課題を出し合って「正直・本音・安心感」という目標を設定しました。この3つを軸としながら、時間の意識なども課題として挙がってきました。チームとしての目標を達成するために後半戦に自分ができることは何かを考え、仲間への励ましや視野が狭くならないように周囲をみて動くことを目標にしました。時には、体も心もしんどい時があって、自分のことで精一杯になってしまうこともありましたが、それぞれがチームのために行動して8人で目標達成することができたと思います。

「危機管理」については、道に迷った時には、必ず分かるころまで戻るということを覚えておかなければならないと思いました。5日目のグループでのファイナルツアーでは、朝テントの場所から出るのが遅かったのもありますが、現在地を見失ってしまい日が

暮れてしまったということがありました。山の中で、暗くなってしまうと危険度が上がり、大怪我に繋がってしまうことも予想されます。進むことに一生懸命になりがちですが、この学びを生かして活動していきたいです。また、6日目の十種ヶ峰の山頂から下山して歩いている時に、ハンガーノック(エネルギー不足)になってしまいました。昼食の一部を後に回してしまったことによって、フラフラしたり、手が痺れたりする症状が出ました。食べることの大切さを身をもって感じ、来年子ども達にはなってほしくないの、よく伝えて自分自身も気を付けていきます。

この研修を終えた後、日常に還元したいこととして主に3つあります。

1つ目は、「限りある時間を大切にすること」です。1日は24時間。この9日間を過ごす中で、時間の大切さについて改めて考えるタイミングが何度かありました。1日目のリーディングで仲間が「時間の使い方が、いのちの使い方になる」という詩を読んでくれて、はっとさせられました。私は、一つのことに集中してしまうことが多いのもっと時間を有効活用するために、物事に優先順位をつけて見通しをもって取り組んでいくことを意識していきます。

2つ目は、子ども達への指示や説明をより端的に分かりやすくすることです。活動中は、仲間とコミュニケーションを取る時に、伝えるべきことを短い言葉でわかりやすく伝えることが安全・安心に繋がる一つのポイントでした。学校現場でも、学級で教師から児童に指示や説明をした際に自分自身は伝わるように話したつもりでも、3分の1の人には伝わっていないことがあります。まずは、自分の伝えたいことを整理して「短い言葉で、端的に」を大切にしていきます。

3つ目は、「分からない。」と言えない子への配慮・関わり方についてこれまで以上に考えていきたいです。全部自分の気持ちを言えなくても、少しでも自己開示してみようかなと思えるようにするためには、教師の支援はもちろんですが、周囲の受容的な雰囲気づくりをしていくことが求められます。言葉で「こうすることが大事だよ。」と言うだけでなく、児童同士の直接的な関わり場の場を設定すること、その後のふりかえりの時間も意識しながら(PDCAを短いスパンで回していくことも)2学期は向き合ってみようと思います。

最後に、8泊9日のチャレンジを支えてくださった県の職員の方をはじめ、十種ヶ峰青少年自然の家スタッフの皆様、関わってくださったすべての方に本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。来年は参加する子ども達の学びを支えていけたらと思います。



高橋 莉沙（山口県野外教育活動研究会）①/2

思っていたより何倍も過酷で、初日から分からないことや孤独感、不安で、テントの中で「苦しい、帰りたい、辞退したい、するべきでは…」と思っていました。たっけの「チームとしてどういう姿でいたいのか」という投げかけにも、「他の皆は少し関係ができていられるけれど、私にとっては初対面の人だらけ、皆とも壁や熱量の差がある…」と、自分の考えがないことに申し訳なさを感じていました。

2日目、皆も眠れていないんだと聞き少し安心しました。上り坂がずっと続き、息苦しくなり、きつい。いっこーが「元気かみんなー」と声をかけてくれたり、おんずーも「こちらが今日の坂です」、くらあやが「いや、もうずっと坂じゃん！」という会話をしている、ユーモアはしんどさを軽くしてくれるなど思いました。でも、肩も痛い、息が苦しい、どうとう進めなくなり、もえちゃんが「リー大丈夫？ ゴープ食べて」と心配してくれたり、えいみーとくらあやも水を出してくれて、きつさが幸せに変わり元気が出て進めました。人生で一番きつい時だと思っていました。今思えば、序の口でした。弟見山、仏峠と登り、その間ずっと黙々と登っていて、皆を気に掛けるとか出来ていなかったです。頭の中で、闘病中の方や私を産んでくれた母は、もっときついのだろう、私はまだ自分の足で歩くことができている幸せだと思っていました。ミーティングでいっこーが「しんどい時こそ、自分の中にためず、自分で自分の気分を上げていくようにしていかないと」という言葉が胸に響きました。たっけの「痛いとかきついとか、そういう時こそ皆で力合わせて、声出して乗り切ろう!!」という言葉も印象的です。じゃあ、私は素直にしんどい時「休ませて」と皆に正直に伝えることを目標にしよう、もえちゃんの「私もうーりだって昨年泣き叫んだ気がするんです。痛いとか辛いとか、皆、自分の中で飲み込んでて優しいなど思うけれど、正直に言い合える関係でいたいと思う」という意見が、かっこいいなと思いました。

3日目、眠れてなくて、これで登れるのか不安になりながら、いっこーが後ろから話しかけてくれて嬉しく、目もさえて元気になってきました。笹を3本くらいつかみながら行くと登りやすいとアドバイスもくれました。「りょうさん、風強くしてー！」と皆で叫んでいると、本当に風が吹いてきて、驚きました。昨日の反省を思い返し「休憩させて」は素直に言えていたけれど、ちーちゃんとの距離をあけすぎていたり、私がマイペースに止まることで、後ろの皆が斜面で止まっていないといけなくなり、そのせいもあってか、いっこーがしゃべられないほどきつくなっていました。くらあやが「リー、(後ろのこと)気にしなくていいから、早く前行って!!」と言っていたのは、後ろを気遣っていたからだだと後から分かりました。いっこー、わっくんが、えいみーに木の棒を拾って渡してあげていました。桐ヶ峠、怖くて中々進めない私を皆が見守ってくれたり、アドバイスをくれたり、感激しながらも、怖くて声

が出ませんでした。1つ1つ、皆の言葉を聞いて、信じ、進んでいきました。いっこーの「リー下見ないで、こっちの方を見ながら斜面に体あずける感じでおいで」と温かな伝え方に安心し、渡り切った後ちーちゃんの「ナイス！」に励まされました。斜面が怖くしゃがみこんでしまい、膝がきつくなるも「リー、今助けるよ！」ともえちゃんがリュックを上を持ち上げてくれ、気力がわきましたが、今度はもえちゃんが歩けなくなってしまいました。心配かけまいと「大丈夫！ いけるよ元気になった！」と皆を励ます姿に、私は反省の嵐でした。えいみーが、テン場で「もえちゃんよくがんばって歩いたよ！！」と励ましている姿に感激しました。おんずーも、自分も苦しい中、どの石なら上に乗っても危なくないか、1つ1つ、教えてくれて、感謝感謝でした。ソロ明けで、道に迷い、一番怖かった谷底は、一生忘れません。ここを登らないと時間内に戻れない？ 落ちたら死ぬ。もえちゃんの「リー、怖いけど、足を上に上げる！！」と皆を思っの厳しい喝。あの時の私にはそれが一番良くて、死にたくない、怖い、信じられない、でも足が限界だ、無理だ、これ以上進むと下に落ちそう、でも、もえちゃんの言葉、おんずー、わっくん、いっこーが自分も怖い中、手を貸してくれたり、励ましてくれたり、上まで登りきり、その後、泣きじゃくり「みんなごめん」と言った自分が情けなく、恥ずかしく、最低だと思いました。責めたり不安にさせたりすると、私が進めず下に落ちてしまうと皆が思ったのか、「リーがんばっちゃよ！」「一歩進んだよ！」「ごめんねより、ありがとうと言おう！」とチームで励まし合い、私の荷物を持って下さったたっけにも感謝しながら怖いけれど皆の言葉を信じ、一步一步下りていきました。いっこーが「リー、木の根っこ最強やったろ！」「たっけについていけば大丈夫」の言葉に安心し、皆怖くて一杯一杯なはずなのに一致団結感を感じました。自分一人で助かろうとしている人は一人もいなかった。とみー、りょうさん、スタッフさんが来て下さり、安心しました。「リー、自分たちにできることは謝ることじゃなくて、明日チームのために何ができるか考えることだ」この言葉はずっと刺さっています。ありがとう。本当に、生きのびたのは皆のおかげ、私ができることは、辞退することだと心から思いました。

5日目、一発目の上り坂も急で昨日を思い出してしまっただけで、皆いるし、皆の言葉を信じていけば大丈夫、皆、上がる事しか考えていない、落ちてもここは死なない場所、怖くない！と安心していました。このチームなら、乗り切れる！！おんずーが水を持ってくれたり、「犬派？猫派？」と話しかけてくれたり、ゆるやかなずっと続く坂道に足はきつなくなってきましたが、心が和み、感謝していました。わっくんが、「リー、先頭行っていいよ」と、後ろを気かけながら、何かをゆずってくれていることが伝わりました。皆苦しそうな顔をしているのが分かったので、十種ヶ峰山頂でスタッフの皆様に見守られながらゴール出来た時の8人の笑顔は、はじめていたと思います。安心して

高橋 莉沙（山口県野外教育活動研究会）②/2

ました。ちーちゃんがダウン、ハンガーノックにもなってしまったけれど、もえちゃんをはじめ、皆で助けあって、元気になってきた。ご飯も食べられて、次の日からも参加できて、良かったです。

8/1、マウンテンバイク。自分は乗れないのではないかと不安でしたが、「皆の言葉を信じよう、進まない」と皆の歩みを止めてしまう」という思いで、怖さを乗り越え、運転することが出来ました。とみーが、後ろで見守ってくれていたことも心強かったし、りょうさんの「ゆっくりゆっくり左足に言い聞かせて、1・2・3…」と、怖くてこげなかった私へのアドバイス、おまじないのようでした。怖いと感じている人に対して、ゆったりとした口調が、安心感につながり、乗れるようになるのだと勉強になりました。

ロッククライミングは、わっくんのビレイヤーをする時が、一番怖かったです。私がきちんとしないと、わっくんが挑戦できない。思った以上にロープが重く、必死でした。いっこー、もえちゃんが、やり方を教えてくれて、たっけもいる安心感で、わっくんの支えになれていたら、良かったです。えいみーが、「リーがいたから、一番上まで頑張ろうって思えた」の言葉、嬉しかったです。自分も怖いはずなのに、私に「リー、膝曲げんで、まっすぐ降りていくんよ！」と、えいみーがアドバイスくれて、下で皆が見守ってくれている安心感から、不思議と、そこまで怖くはなかったです。ですが、いっこーや、わっくんみたいに「つま先でふん張ったらいいよ」「岩に体つける感じがいいよ」など、アドバイスをどうすればいいかわからず、怖くて不安で一杯だったのが反省です。谷底のことを思い出し、「ここで登れなかったら、あの時の皆が私に向けてくれたパワーが無駄になるのでは」と思ったことが、一番上まで登れた原動力になりました。

8/2、サイクルマラソン、皆で並んで走る時も、怖かったです。（皆に怪我させるのが怖い）「私一番後ろがいい！」と本音を言えました。いっこー「わかった。じゃあ、後ろから2番目でいい？」と尊重してくれて、「こうしたら楽よ」などアドバイスもらいながら、今度は、ソロのサイクルマラソン。少し自分のペースで走れることに、安心と不安がありながら、「リー、一步一步進むよ！！」と、もえちゃんに言われているかのように思いながら走りました。スタッフさんの温かさ、皆のメッセージボードに元気をもらえました。途中、道に迷ったかと思い、来た道に戻り、悩んでいる所に警察の方が来て、「熊が出るからね、気をつけて」という言葉に、テンションが一気に下がりましたが、たっけが助けに来てくれて、途中、登山してないかと思う不安な道があったり、落石注意の看板も怖かったけれど、とみーが立っている場所に無事着き、皆同じようなことと思ってたんだと分かるメッセージボードを見て、感動しました。りょうさんが、ずっとライトで照らしてくれて、一回川に落ちそうになり「あぶなっ！！」と叫んで

しまったけれど、りょうさんが「ナイス！よく気付いたね！」と声をかけてくれて、元気が出ました。皆が「リー、がんばれー！！」と声を出して待っていてくれた時は、本当に嬉しかったです。ゴール出来たのは、皆の支えのおかげでした。8泊9日を、皆と迎えられたこと、奇跡のようだと思っています。それは私が頑張ったというよりも、7人の、自分が苦しい中でも、周りを気遣う温かさ、8人で乗り切りたい、挑戦する自分でいたいという熱い思いが、自分をまっすぐな気持ちにさせてくれたのだと思います。

たっけ、とみー、ちーちゃん、おんずー、くらあや、いっこー、えいみー、もえちゃん、わっくん、スタッフの皆様、命をかけて、見守って下さり、ありがとうございます。みんな、本当に、ありがとう。生かされている命、自分はこれから先、何か人のためにできるかな、この経験が、誰かの何かの助け、支えに、なれますように。楽しく笑って生きていきたいです。

本当に本当に、ありがとうございました。



藤本 萌佳（宇部市立川上小学校）

私は、昨年度もこのプログラムに参加していました。昨年度は途中で中断となってしまったため、リベンジしたいと思い、本年度も参加しました。8泊9日、チームのメンバーと様々な困難を乗り越えていく中で、チームがどのように形成されていくかを体感しました。そして、より居心地がよく、安心感のあるチームになっていくためにどのようなことが大切なのかを学びました。

2日目に、筋ヶ岳や弟見山を登り、仏峠へ向かった時には、お互いにまだ遠慮がありました。荷物は重く傾斜も厳しいので、とても苦しい状況でしたが、体調を気にかけても「大丈夫だよ。」と黙々と歩き続けました。お互いに心配をかけまいと、それぞれが一人で抱え込んでいたのだと思います。夜のミーティングで、このことについてメンバーに投げかけました。同じチームだから、「きつい。」とか「苦しい。」などの弱音や本音も見せ合い、辛いことはお互いに支え合えるチームでありたかったからです。メンバーと話し合い、8泊9日を通したチームのゴールを「正直に本音を言える安心感のある関係になる。」ということに決めました。一人ひとりが、それぞれ殻を破って自分を出し始めた瞬間だったと思います。

みんなが意識したのが「正直」や「本音」だけだったら、もっと喧嘩や対立が生まれていたと思います。今回のメンバーは初めから、「相手を思いやる配慮」がありました。一人ひとりが、安心感を意識したからこそ、それぞれを受け入れる優しい関係になれたのだと思います。3日目、リーダーとして「あの時休憩をとるべきだった。」と思い悩んでいた時も、「8人で決めたことだから、その悩みも一人で抱えることはなく、8等分の1でいいよ。」と声を掛けてくれるなど、メンバーはいつも励まして応援してくれます。私は「相手を不快にさせているのではないか。」「申し訳ない。」と思う癖があります。3日目も、つい発言したことが周りを不快にさせたのではないかと不安になることがありました。でもそれは、相手が自分を受け入れてくれると信頼していないからだで気付き、安心感を育むためには周りへの声掛けを配慮するだけでなく、「本音で伝えても、相手は蔑んだり軽んじたりしない」と信じることも大切だと学びました。

徐々に本音を話せるようになっていったチームでしたが、3日目のQVへ向かう際にさらに団結力が増す瞬間がありました。一人のメンバーが、急な下り坂に不安を感じていた時、「この岩場に足をつけるといいよ。」とか「まず左足を出すといいよ。」とアドバイスなどもしながら全員で見守ったときのことです。彼女が勇気を出してチャレンジしているのを見たら、私たちまで勇気もらって応援したくなり、一人をみんなで支えることができました。「8人でゴールに近づく」という目標を8人みんなで共有できていたから、より一層団結できたのだと思います。

チームのメンバーによって、得意なことや苦手なこ

と、身体能力、考え方などの個性が様々です。まるで、教室の縮図のように感じました。苛立ちを相手にぶつけたり、排除したりするのは簡単だけど、受け入れて認め合うのは難しいことなのだと思います。私も困っている彼女にどのように声を掛けて助けたらいいのか、悩みました。手を貸すべきなのか、信じて待つべきなのか、それは対等な関係でいられているのか、考えるほど難しくなりました。でも一人ひとりが「チームの一員」としてお互いのありのままを受け入れようとしたから安心感があつたのだと思います。頑張っている姿を応援していたように、お互いの存在を認めることが大切なのだろうと思います。

そんな安心感のあるチームでも、5日目に上宇津根を目指したときには余裕がなくなる場面がありました。道に迷い、日も暮れ始めている中で、怖さや疲れ、意見の違いなどから、本当に窮地に追い込まれたと感じる瞬間でした。何とかしなくてはいけないと思った時、大声を出しながら、気を強くもって乗り切ろうとしたことに驚きました。あるメンバーの弱音に対して「自分のためにもチームのためにも、今踏ん張って頑張らないといけない。」と少し厳しいことを伝えたり、反対に日が暮れてしまい一層不安になったときは別のメンバーに甘えたりするなど、お互いに鼓舞しながら乗り切りました。チームの全員が「8人でゴールする」という強い意志を持っていたからこそ、途中でくじけることなく支え合えたのだと思います。追い込まれたとき、それでも「なんとかしよう」と踏ん張り粘ることの大切さを学びました。無事に乗り越えた後の、みんなの安心した表情が今でも忘れられません。

そのようにピンチを乗り越えながら、お互いに支え合いゴールを目指したチームなので、解散したくないなと一層強く感じるようになっていました。なので、サイクルマラソンではチームから自立することを目標に掲げ走りました。サイクルマラソンで一人きりになったとき、登り坂できついと感じていると、傍にはいないけどメンバーが励ましてくれているような気がしました。実際にその場になくても、相手を信頼し、励まし合って勇気もらえることが嬉しかったです。傍にいないでも力をもらえる仲間に出会えたことが、かけがえのない宝物だし、本当に幸せだなと感じます。

8泊9日というこの短期間で一つのチームがより強固な関係になっていく過程を体感することができました。それには、正直に気持ちを伝えたり、それを受け入れたりする安心感が大切なのだと学びました。さらに、窮地に追い込まれたとき、互いを支えながら気を強く持つことの大切さも痛感しました。そして、お互いの挑戦を見守り応援する仲間がいると、頑張っただけで挑戦しようという勇気が湧くことも実感しました。

素敵なメンバーに恵まれ、良いチームになれたことや、それを皆さんにサポートしていただいたことに感謝したいです。今後学校現場で子どもたちと関わる上で、今回私が感じたようなことを忘れないようにしたいと思います。そして、子どもたちがより良い体験ができるように支えていきたいです。

和久 智哉 (防府市立華城小学校)

これまで、自分がスタッフとして長期キャンプに関わることが多かったため、初心に戻った気持ちで参加することができた。参加する前は、不安なことが多かったが、いざ始まるとそんな気持ちはすっかりなくなり、楽しむことができた。今回のキャンプは、子どものキャンプのスタッフになるための研修会ということで、インストラクターになるために必要となる視点を探すことを意識していた。

まず、1日目に行ったダッフルシャッフルでは、荷物を詰める上で基本となることを学んだ。ポリ袋の中に荷物を入れることで水から守ることができるということ、寝袋を下に置くことで安定したり、小さな物で隙間を埋めたりするということなどを知ることができた。インストラクターを務める際には、しっかりと伝えていきたい。しかし、初日は安定した場所で行えるが、2日目以降は坂や石の多いところで行わないといけないうことを忘れずにいたい。また、トレーニングフェーズということで、歩く際にも「伝言」や「しりとり」など山に入ったときに大切になることを知ることができた。そして、なんといっても用水路の水に手を入れたときの冷たさは、忘れられないほど気持ちが良かった。

2日目、スタートして最初の急登は心が折れそうになった。枝がたくさん落ちていたり、岩が転がっていたりしていた。そういうときこそ、1日目に行った「伝言」が大切になってくると感じた。その伝言も、端的かつ必要なタイミングで行わなければ伝わらないと思った。具体的には、端的という点では、「どこ」に「何」と伝えることが大切で、タイミングの点では、情報のみが先行しても伝言の意味をなさないということが大切だと思った。また、コンパスの使い方についても、進行方向を合わせるために使ったり、現在地を確認するために使ったりと、様々な使い方があるということが分かった。

3日目、少しずつ自分たちで歩みを進めることとなり、コンパスを使ったり、地図から地形を読み取ったりすることが増えた。一人では気づくことができないようなことでも、八人が力を合わせることで気づくことができたと感じている。役割分担の中に、「ナビ」と言う役割こそあるが、やはり一人に頼るべきではないと思った。そして、桐ヶ峠からQVに向かう下り斜面は、これまで通ってきた道の中でも特に大変だと感じた。道幅がほとんどないようなところでロープをつかんだり、手を地面につけたりして進むことや、橋のない小川を超えることは、このキャンプに来たからこそ行えた体験だと思う。このとき、AFPYを行う際の、「Cゾーン」「Sゾーン」「Pゾーン」のことを思い出し、「この人は今、〇ゾーンかな」と考えることができた。そのことから、やはり個人によって、課題に対する捉え方は異なり、これは今後の学級経営でも関係してくることだと思った。

4日目、これまでの自分を振り返り、今後の関わり

方について考えるソロの時間。疲れていたため、ほとんど寝ていたが、時間を忘れて過ごせるのはとてもステキなことだと感じた。

5日目、この日から完全に自分たちで考えて進むことになった。ソロ明けの朝は、1日ぶりの仲間との会話を花が咲き、美味しいフルーツをたくさん食べた。久しぶりの下界で、とても新鮮な気持ちにもなった。そして、山へと入り、コンパスで方向を合わせて順調に進んでいると思いきや、進んだ先は目標の峠ではなく、谷だった。周りの状況から島根県側に逸れていたことまでは分かった。このとき、以前に参加したことのある研修で学んでいた、「迷ったら、分かるころまで戻る」という言葉が頭をよぎった。しかし、また斜面を登るのも体力的にしんどく、少しでも目標の方向に進みたかったため、尾根を上がり、斜面を横切る選択をした。結局、横切るのが難しく、少しずつ上に登っていた。体力的に限界が近づいていたため、休憩をとったところで、イントラからストップがかかった。結果論になってしまうが、あのときもっと強く戻ることを薦めればよかったと後悔をしている。「本音」という目標をみんなで立てたにも関わらず、しっかり言えなかったことから、次からはきちんと言おうと決意した。その後、イントラの先導の元、安全第一で目的地を目指した。暗くなる中、道を探してくださったり、応援をしてくださったりしたスタッフの皆さんには感謝しかない。あんなステキなスタッフになりたいと思った。その日の夜は、短い時間だったが、本音で語り合うことができた。

6日目、十種ヶ峰山頂を目指して、ラストスパート。子どもと途中で会った際には、来年の自分を想像することができ、とてもわくわくした。前日の失敗を生かし、コンパスをしっかり合わせるも、途中で不安になり同じ道を行ったり来たり。そのおかげで、道を間違えずに進むことができたと言っても過言ではない。そして、十種ヶ峰山頂に到着し、360度の大パノラマ。これまでの辛いことも全て吹き飛ばぶくらいの解放感に包まれた。ここまで頑張ってきた自分たちへのご褒美のようにも感じた。

7・8日目は、グループから個人へと戻っていくフェーズとして、ロッククライミングとマウンテンバイクを行なった。みんなに支えられているということを実感しながら、自分の目標へと突き進んだ。

辛いことも、楽しいこともたくさんあり、普通にはできない経験を積むことができた。大学の頃から目指していた、アドベンチャーキャンプスタッフへ一歩近づくことができた。このような機会を与えてくださった、全ての皆さんに感謝の気持ちでいっぱい。また、この経験を学級経営にも生かしていきたいと思う。



令和7年度 山口県野外教育活動指導者 アシスタント研修会修了にあたって

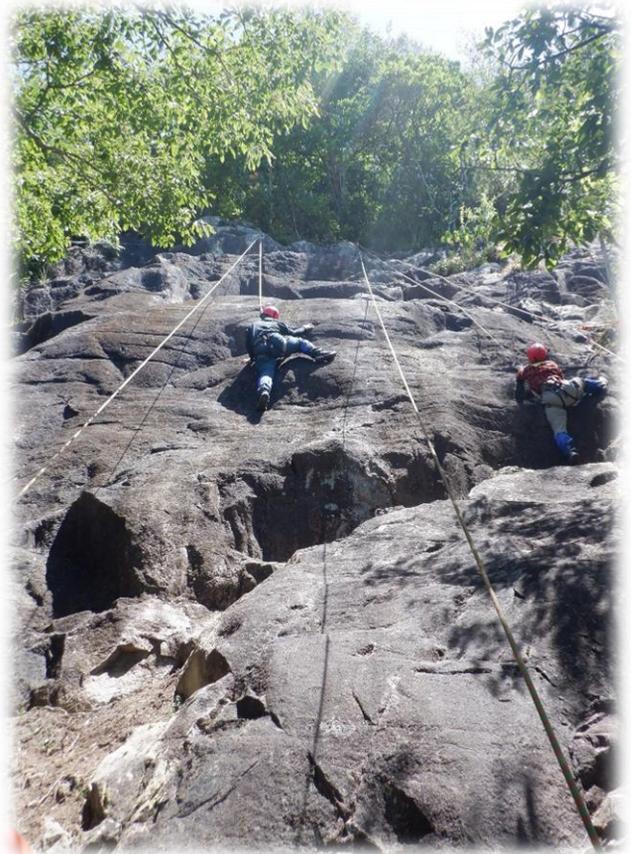
森岡 真矢（山口市立大内小学校）

私がこの研修で学んだことは二つある。一つ目は子どもたちと同じ目線で立つこと、二つ目はチャレンジを通して自分も知り人も知ることができるということである。

まず一つ目について、この言葉自体、私が教員になる前の実習先でいただいた言葉で、「子どもの気持ちになるためには物理的に同じ目線になることが大事である」ということである。想像するのではなく、子どもがしゃがんだらしゃがんでみる、座ったら同じ目線の高さになるようにする、ということである。同じものを見たり聞いたりしてそれを共有できることもよいし、その姿勢は子どもたちにも伝わる、という教えだった。それ以来、その言葉を意識して学校や活動に臨んできたが、今回のアシスタント研修では今まで以上に子どもと同じ目線に立つ大切さを学んだ。子どもたちと同じ道を歩き、同じ音を聞き、同じ景色を見る。見ているだけでは子どもたちと共有できなかった思いがあり、同じ思いを持ったからこそ交わせる言葉があると実感した。

二つ目については、ロックのチャレンジを私もさせていただいたことから学んだことである。急遽参加させていただいた場所は、過去に半分で降りた記憶のあるロックサイトだった。しかし、その日は「自分の中で何か過去を変えたい」と自分にチャレンジをしようと思った。ロックが決して簡単ではないことを少し知っていて、子どもたちにも超えてほしい一歩があった分、今自分が越えなければ何も伝わらないとも思った。そうして大汗をかき、泣きそうになりながら最後まで登りきれた時の景色は正直涙と汗で見えなかったが、一歩勇気を出してよかったと思えた。また、降りたときに子どもたちも、大人も拍手をして迎えてくれたことで、自分のチャレンジが支えられていたものだったと実感し、感謝の気持ちが溢れてきた。今後、チャレンジという場面に出会ったときは、自分を信じることと、させてもらえる環境に感謝できる今回の研修のような素敵な瞬間を作りたいと思った。

三日間このアシスタント研修で子どもたちに出会い、学びをいただいたこと、支えている沢山の力を感じることができたことに感謝を申し上げたい。



令和7年度 地域と連携したリアルな体験活動充実事業報告書



令和8年3月

山口県教育庁 地域連携教育推進課
青少年教育班
山口県山口市滝町1-1
電話 083-933-4650